



八女市元気プロジェクト ーコミュニティFMを活用した地域活性化 2011年度提言報告書

慶應義塾大学飯盛義徳研究室

目次



1. プロジェクト概要

- 1-1. プロジェクト概要・目的
- 1-2. プロジェクト推進イメージ
- 1-3. プロジェクトメンバー(教員)
- 1-4. プロジェクトメンバー(学生)

2. 2011年度プロジェクト内容

- 2-1 活動体制
- 2-2 疑似体験まちづくりディスカッション
- 2-3 学生チームの活動
 - 2-3-1. ラジオチーム
 - 2-3-2 若者チーム
 - 2-3-3 ITチーム
 - 2-3-4 つながりチーム
 - 2-3-5 勉強会

3. 2011年度プロジェクト成果

- 3-1. 成果1:「資源化プロセス」
- 3-2. 成果2:「コミュニティ形成」
- 3-3. 成果3:ORFにおける発表
- 3-4. 成果4:メディア掲載・ラジオ出演

4. 2012年度以降のプロジェクト提案

- 4-1. 2012年度活動内容の提案

1

プロジェクト概要

1-1. プロジェクト概要・目的

本研究プロジェクトは、福岡県の「個性ある地域づくり推進事業費補助金(ITを活用した中山間地域活性化事業)」の支援を受けている八女市、九州テレコム振興センター、慶應義塾大学飯盛義徳研究室(地域情報化研究コンソーシアム)との連携により推進される。

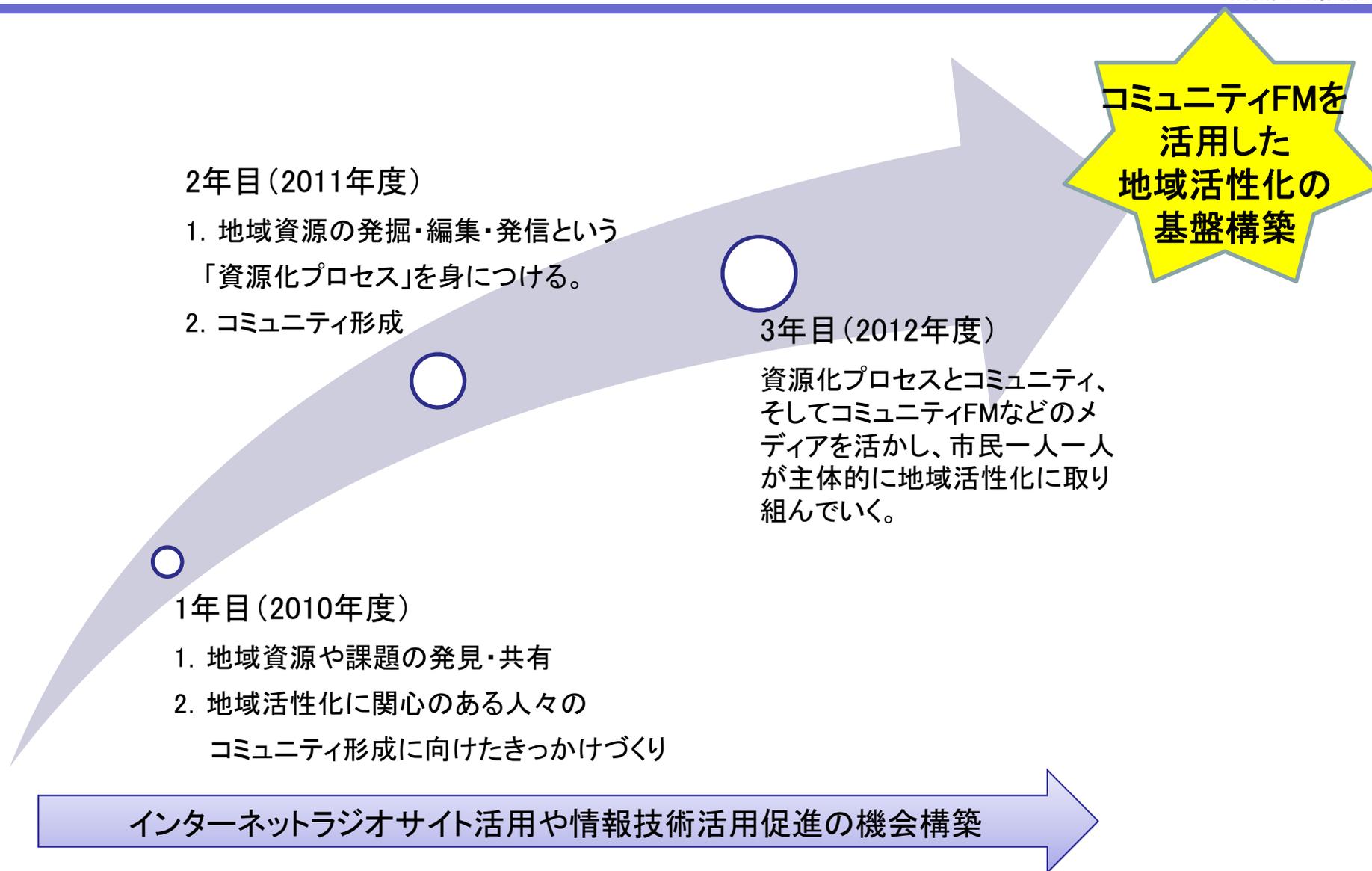
福岡県八女市は2006年10月1日に上陽町、2010年2月1日に黒木町、立花町、星野村、矢部村を合併し、今後、新八女市としての魅力を打ち出し、課題を解決していくことが希求されている。中でも、コミュニティFMや情報技術を活用した地域活性化が課題の一つであり、本プロジェクトは、そのための解決策に、実践と研究の両輪を回すことにより取り組むものである。情報技術を活用して地域活性化を実現するためには、地域の資源を見出し、発信し、地域を盛り上げていくことのできる人材がいかに活躍できるかにかかっているといっても過言ではない。また、地域活性化に関心のある人々が集まり、切磋琢磨できるコミュニティ機能も不可欠である。

そこで、本プロジェクトでは、コミュニティFM開局に向け、八女市における人と人とのつながりを形成し、新しい活動などが芽生えるようなプラットフォームを設計することを目指す。具体的には、まず、コミュニティFM、情報インフラの整備だけにとどまらず、地域の人々の協働によって、資源を再確認し、それを発掘、編集していくプロセスが起こるような仕組みをつくる。このような活動の中で、新しいつながりが形成され、地域をどのように元気にしていくのかの意味づけが行われ、一体感が醸成されることが期待される。次のステップとして、自らが発見、編集した地域資源、情報を外部に発信するという、「資源化のプロセス」が起こる機会をつくる。そのために、地域の人々の協働をもたらし、方向性を打ち立て、思いを広め、情報発信を推進していく人材が不可欠であり、人材の育成と、八女市の地域づくりに関心のある人々のコミュニティ形成の支援を行っていく。

2010年度は、8月に合宿形式で、八女市の方々と飯盛研究室の学生が合同で、フィールドワーク、意見交換、提言発表会を実施した。2月には、旧市町村ごとにフィールドワークとワークショップを行い、地域資源の再認識と地域活性化に関心のある人々が集まるコミュニティ機能の構築に取り組んだ。また、実験的インターネットラジオサイト「八女の話音」を制作することにより、今後、地域の人々の協働により、資源を発掘、編集していくプラットフォームを設計した。

今年度は、昨年度の成果を活用し、地域の人々の協働をもたらし、市民の方が自らが地域資源を発見、編集し、情報を外部に発信するという「資源化のプロセス」が起こる仕掛けをつくることを目指した。そのために、学生メンバーを増やし、4チーム体制で取り組んだ。ラジオチームは、コミュニティFM開局に向け、主に情報発信をテーマにしたワークショップを行った。若者チームは、地域を担う若者を育成するため、ジュニアケースメソッドとラジオ作成ワークショップを実施してきた。ITチームは、情報発信の際に必要なITリテラシー向上を目的としたワークショップを開催した。そして、つながりチームは、地域を盛り上げる人やFM八女に関わる人のコミュニティ形成を目指して、様々な形でフィールドワークを展開した。これらの活動の最終成果として、2012年3月、ぼんぼり祭りにおいて、学生と市民の方が各々の活動を発表をする「八女の話」を企画、実行した。この中で、多くの市民の方のご協力をいただきながら、学生たちは祭りの運営も手伝わせてもらい、市民の方と学生たちが一緒にまちづくりに取り組むことが実現した。

1-2. プロジェクト推進イメージ



2年目(2011年度)

1. 地域資源の発掘・編集・発信という「資源化プロセス」を身につける。
2. コミュニティ形成

3年目(2012年度)

資源化プロセスとコミュニティ、そしてコミュニティFMなどのメディアを活かし、市民一人一人が主体的に地域活性化に取り組んでいく。

コミュニティFMを活用した地域活性化の基盤構築

インターネットラジオサイト活用や情報技術活用促進の機会構築

1-3. プロジェクトメンバー(教員)

- **飯盛義徳:総責任者**

慶應義塾大学総合政策学部准教授、

慶應義塾大学SFC研究所地域情報化研究コンソーシアム代表

▪ 慶應義塾大学大学院経営管理研究科博士課程修了、博士(経営学)。松下電器産業株式会社、飯盛教材株式会社などを経て現職。1999年にNPO鳳雛塾設立。2005年、慶應義塾大学環境情報学部専任講師。2008年、総合政策学部准教授、現在に至る。専門は、地域情報化、地域再生など。総務省・過疎問題懇談会委員などを務める。主著に『元気村はこう創る』、『社会イノベータ』ほか。地域実践活動に関する大学教員ネットワーク幹事。

- **西田みづ恵:総括プロジェクトリーダー**

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科博士課程、

慶應義塾大学総合政策学部非常勤講師、佐賀大学理工学部非常勤講師

▪ 1982年、福岡県八女市生まれ。2007年、慶應義塾大学総合政策学部卒業後、同大学大学院政策・メディア研究科修士課程に進学し、2009年修士(政策・メディア学)取得。現在、同大学院博士課程3年、同大学総合政策学部非常勤講師、佐賀大学理工学部非常勤講師。2012年度からは、東北公益文科大学非常勤講師を兼任。2005年、地域の若者のアントルプレナーシップ育成プロジェクト「VITA+」(ビータプラス)を立ち上げ、高知県、佐賀県、和歌山県、福井県、神奈川県、鳥取県などに展開、活動継続中。2010年、地域の人材を育てる若者を育てるプロジェクト「結塾ネットワーク」を開始。2012年より、NPO法人キャリア・エンパワメント理事。

- **木口恒:アドバイザー、「八女の話音」担当**

慶應義塾大学SFC研究所所員(訪問)

1-4. プロジェクトメンバー(学生)




ラジオチーム

リーダー: 藤川徹也 (3年)
 仁田原由依(4年)・佐竹真悟 (4年)・西中彰平 (3年)
 高野未久 (3年)・深野真央 (2年)・久保田圭祐(1年)



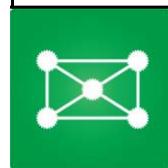

若者チーム

リーダー: 磯谷美帆(3年)
 大久保依美(4年)・坂根加奈子(4年)・加藤史紘(3年)
 高野未久(3年)・藤田薫子(3年)・星出直柔(3年)
 河野佑佳(2年)・佐藤友紀子(2年)・藤村宏哉(2年)
 藤原夏希(2年)




ITチーム

リーダー: 松野幸宗(2年)
 邑本卓也(大学院1年)・近井博規(4年)東真央(4年)
 菅翔太(4年)・町田優樹(4年)・森田潤一(4年)
 酒井謙次(3年)・小澤麗(2年)




つながりチーム

リーダー: 杉智史(4年)
 石塚俊介(4年)・津福和佳子(2年)・松田華保子(2年)

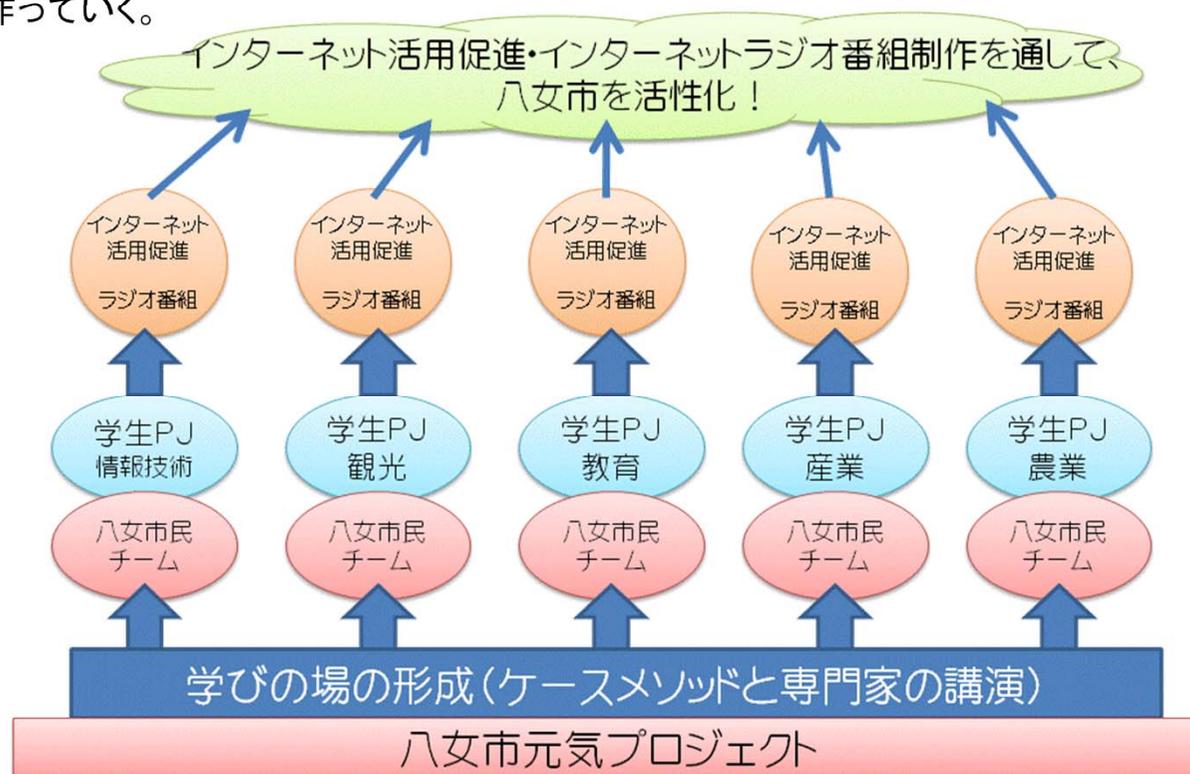
2

2011年度プロジェクト内容

2-1. 活動体制(計画時)

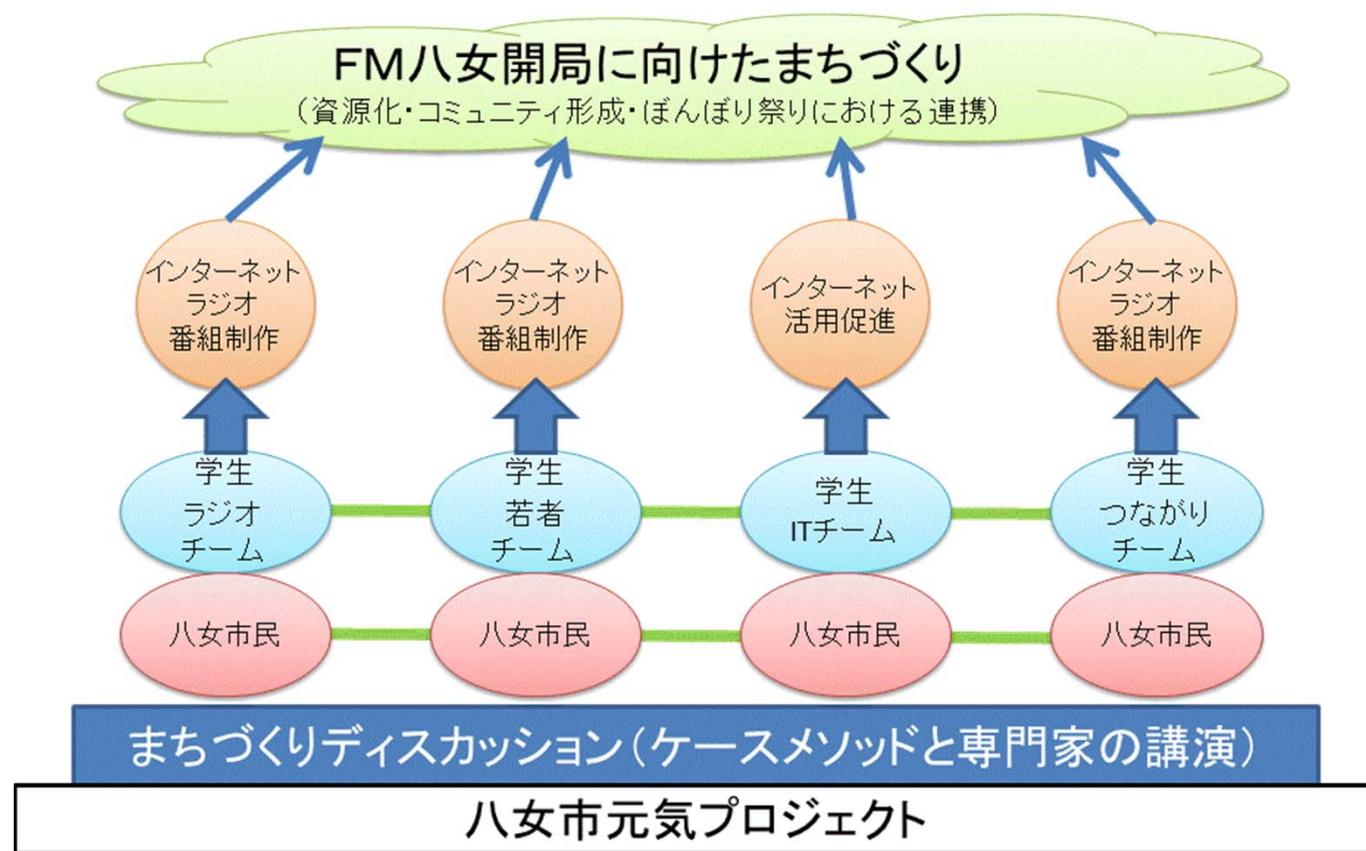
2011年3月の計画段階では、以下のようにプロジェクトをプラットフォーム化し、1年目以上に、市民の方と学生たちの交流、活動が活発になることを目指した。

- コミュニティFM立ち上げに向け、市民の方々が主体的に活動する機会と活動を形にしていくため、通信や防災だけではなく、産業や観光、教育など様々な分野において、学生たちと市民の方々が地域の課題解決に取り組むことができる体制を作る。
- そこで、2011年度は、学生メンバーを広く募集し、研究プロジェクト内容で審査して、選抜する。選抜で通った学生プロジェクトは、計画内容を市民の方と実践しながら、インターネットラジオやコミュニティFMの番組を作っていく。



2-1. 活動体制(実態)

実際には、プロジェクトに参加する学生は前年度の6名から、30名に増え、昨年度のチームはラジオチームに、新たに、若者チーム、ITチーム、つながりチームが生まれ、4チーム体制で活動してきた。さらに、「学びの場の形成」では、専門家と実際のまちづくり活動の事例を通して学ぶ「まちづくりディスカッション」を3回開いた。つまり、学生たちが市民皆さんとワークショップやフィールドワークなどで「動く」活動と、まちづくりディスカッションにてじっくりと意義や可能性、課題を「考える」活動という2軸体制で、2011年度のプロジェクトを進めた。

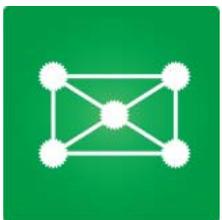


2-2. 疑似体験まちづくりディスカッション

- 「疑似体験まちづくりディスカッション」とは、日本の各地域のまちづくり活動の事例教材を用いて、その当事者の立場になりきって、今後のまちづくりのあり方について、参加者全員で考え、話し合うワークショップである。これは、ケースメソッドと呼ばれる教育手法を用いたものであり、繰り返し行うことで、戦略的意志決定能力、積極的行動力、問題発見・解決能力などを体得されるといわれている。また、本プロジェクト総責任者である飯盛が運営するNPO法人鳳雛塾では社会人向けに、慶應義塾大学SFCの飯盛の授業では大学生に、飯盛研究室VITA+(本プロジェクトの若者チーム)では高校生を対象に実施され、参加者同士の新しいつながりや主体的行動などの効果をもたらしている。
- 昨年度、体験版を開催したところ、また参加したいという声が約80名分集まった。そこで、本年度は、3回、まちづくりの具体的事例を3つ用い、意義や可能性、課題を考え、意見交換した。第1回と第2回は、遠隔テレビ会議システムを用い、第3回には、実際に事例の主人公である、事務局長である塩崎泰雄氏とFM桐生の小保方貴之氏とともに、飯盛准教授が、八女市に赴き、直接face-to-faceで参加市民と議論を交わした。

回	日付	事例
第1回	2011/11/24	「ネット社会と企業経営」
第2回	2011/12/27	「NPO法人鳳雛塾」
第3回	2012/1/19	「NPO法人桐生地域情報ネットワーク」

2-3. 学生チームの活動

チームアイコン	チーム名	活動内容	本報告書
	ラジオチーム	コミュニティFM開局に向け、主に情報発信をテーマにしたワークショップを行う。	P13～21
	若者チーム	地域を担う若者を育成するため、ジュニアケースメソッドとラジオ作成ワークショップを実施する。	P22～30
	ITチーム	情報発信の際に必要なITリテラシー向上を目的としたワークショップを開催する。	P31～39
	つながりチーム	地域を盛り上げる人やFM八女に関わる人のコミュニティ形成を目指して、様々な形でフィールドワークを展開する。	P40～48

2-3-1. ラジオチームの活動概要



■活動概要

ラジオチームでは、コミュニティFMに対する認知度の向上、ラジオに関わる市民のコミュニティ形成を実現するために情報発信を題材にしたワークショップ「楽生くらぶ」を開催してきた。それは、八女市でコミュニティFMが開局された際、市民のコミュニティFMに対する認知・参加の協力が必要であり、市民がパーソナリティやリスナーという形で積極的にラジオに関われる基盤づくりを実現したいという思いからである。さらに、ラジオチームは市民の主体的な情報発信を実現することにより、市民同士の共通認識が持て、地域を越えたつながりの構築や、八女市としてのまとまった魅力発見につながるのではないかと考えている。そこで、地域資源の「発掘」「編集」「発信」のプロセスを「楽生くらぶ」にて体験・習得することにより、市民の主体的な情報発信が行われることを目指した。そして、その主体的な情報発信の場として昨年度立ち上げたインターネットラジオサイト「八女の話音」を活用、充実させてきた。

■活動イメージ



2-3-1-1. 第2回楽生くらぶ



■ 概要

昨年度2月に開催した第1回楽生くらぶでは、地域資源の「発掘」とテーマに、八女市の魅力の発掘・再認識を行った。前回に引き続き、八女市の内外に魅力を発信するために必要な「編集」のプロセスの体験・習得を目的として第2回楽生くらぶを開催した。今回は、地域ごとの開催ではなく、黒木・八女での開催にしたことで、地域を越えた市民のコミュニティ形成の第一歩として、交流が生まれることを目指した。

■ 日時

- 8月26日17時～19時(黒木総合支所 大会議室)参加人数9名
- 8月27日17時～19時(おりなす八女 交流室B)参加人数16名

■ 内容(ITチームと合同)

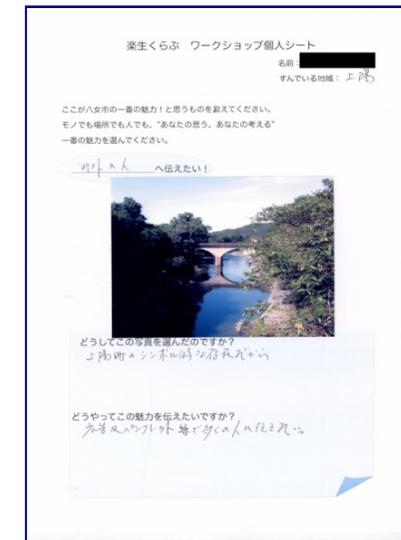
- 情報発信における「編集」プロセスの体験・習得(ラジオチーム・前半)
- ストーリーを重視したツアープランの形成(ITチーム・後半)



<発表の様子>
(おりなす八女)



<議論の様子>
(黒木総合支所)



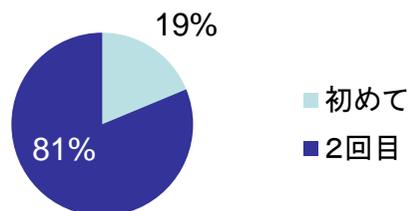
<市民の方が作成した
ワークシート>

2-3-1-2.. 第2回楽生くらすぶの結果

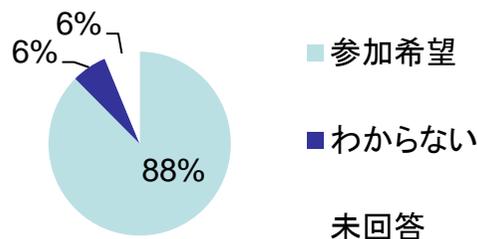


■アンケート結果(アンケート用紙回収率64%、回答人数16名)

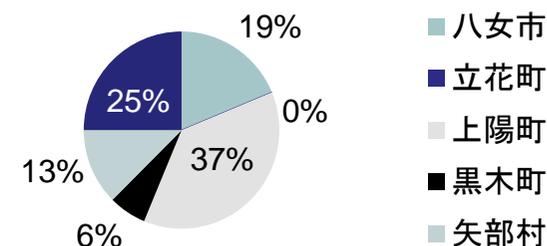
1.前回参加回数



2.次回参加希望



3.居住地



	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P
4.他地域への興味(事前)	5	未回答	10	8	10	7	5	8	7	8	8	未回答	7	10	10	未回答
5.他地域への興味(事後)	10	未回答	10	8	10	7	6	8	9	9	10	未回答	6	10	10	未回答

※アルファベットは参加者、数値は「興味がある」が「10」、「興味がない」が「1」で10段階で表してもらったものである。

6.どのように他地域に関心を持ちましたか。

- ・各地区魅力ある場所、モノ、ヒトまであるのを知り、興味が持てました。
- ・町内でも知らないことが多い合併地域内のことも知りたい
- ・私の住んでる村だけでなく、他の所のいい所が見えてきました。

7.今回のワークショップの内容を、普段の生活の中でどのように活かせると思いますか。

- ・人を呼び込むため、具体的にターゲットをイメージして企画をたてるのに役立つと思います。
- ・奥八女全体での点と点を結んで行く(観光)
- ・地域のアンテナを広げて興味をもちたいと思います

2-3-1-3. 第3回楽生くらぶ

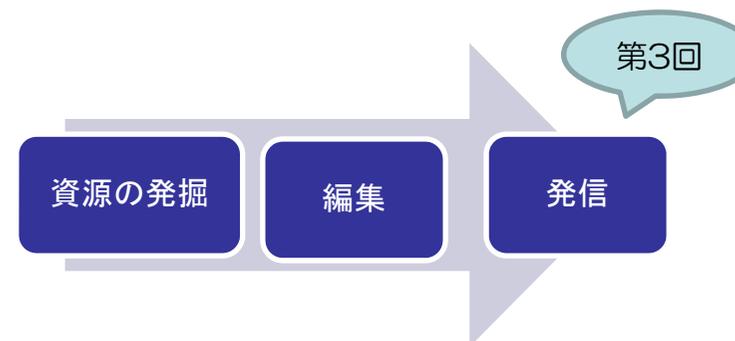


■ 概要

今回は地域資源の「発信」の体験を目的として、「伝えると伝わるは違う」というテーマで楽生くらぶを開催した。第2回の地域資源の「編集」を踏まえ、実際に自分が情報を発信する立場になったことを想定して、相手にきちんと伝わる発信方法を考えるワークショップであった。3人のグループに分かれ、実際にラジオの制作をした。

■ 日時

- 2011年11月26日、14時～17時 おりなす八女研修棟
- 参加人数6名(行政の方2名、ラジオチーム1名を含む)



■ 内容

ラジオチームで作成したワークシートをもとにラジオを制作した。ラジオを聴いてもらうターゲットをこちらで設定し、そのターゲットに対し「八女市に興味をもってもらい、さらに来てもらう」ということを目標に制作にあたった。制作の際、ターゲットが求めている事、八女市の伝えたい魅力、視聴者に伝わるための工夫、時間配分表をワークシートに記入し、それを踏まえてそして1グループ3分のラジオを録音した。録音したラジオを観賞し、気付いた点を発表する時間も設けた。



<説明時の様子>



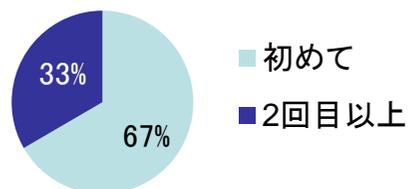
<議論の様子>

2-3-1-4. 第3回楽生くらすぶの結果

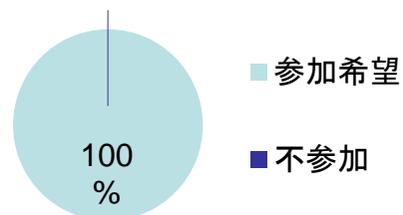


■アンケート結果(アンケート用紙回収率100%、回答人数3名)

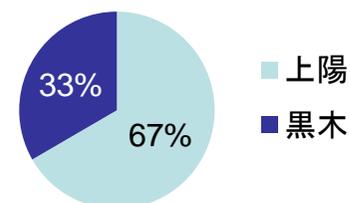
1. 前回参加回数



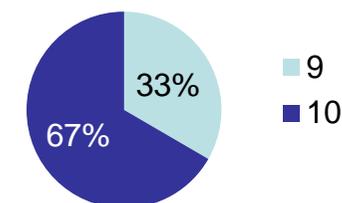
2. 次回参加希望



3. 居住地



4. CFM開局の際、視聴希望



※数値は「希望する」が「10」、
「希望しない」が「1」で
10段階で表してもらったものである。

	A	B	C
5. 他地域への興味(事前)	9	8	8
6. 他地域への興味(事後)	10	8	8

※アルファベットは参加者(前回のアルファベットとの関連性はない)、
数値は「興味がある」が「10」、「興味がない」が「1」で10段階で表してもらったものである。

7. どのように他地域に関心を持ちましたか。

- ・もっと八女市を宣伝したい。
- ・同じ八女市だから

8. 今回のワークショップの内容を、普段の生活の中でどのように活かせると思いますか。

- ・情報発信の能力向上

2-3-1-5. 第4回楽生くらぶ



■概要

ドリームスFMさまより、今年度に開局する「FM八女」の番組についての説明と意見交換会が行われた。同時に、FM八女のロゴに関するアンケートを開催。その後、ラジオ作成ワークショップを行った。ターゲットを理解し、そのターゲットに向けて「八女に興味を持ってもらい、さらに八女に関するモノを買ってもらおう」というテーマでラジオを実際に作成していただいた。ターゲットの求めていることを一度考え、その後、その求めていることに沿う八女の商品を考えていただいた。最後には3分のラジオを完成させて、各チームのラジオを聞き合い感想を交換した。

■目的

第3回に引き続き、「伝えると伝えるは違う」ということを理解していただき、実際に視聴者に伝わるラジオを作成することで情報発信に必要な基本的な知識を身につける。

■場所・日時

- 2月13日 午後6時30分～午後9時 星野支所
- 2月14日 午後6時30分～午後9時 立花市民センター
- 2月15日 午後6時30分～午後9時 矢部公民館
- 2月16日 午後6時30分～午後9時 上陽公民館

■参加者

星野 6名
立花 11名
矢部 7名
上陽 13名



<星野>



<立花>



<矢部>



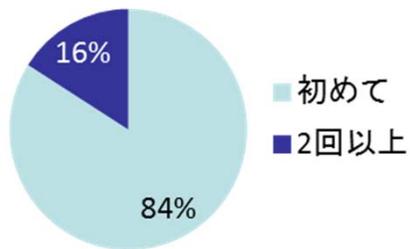
<上陽>

2-3-1-6. 第4回楽生くらぶ

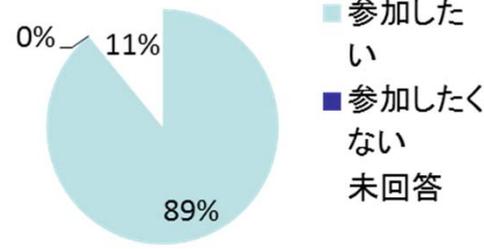


■アンケート結果(アンケート用紙回収率100%、回答人数37名)

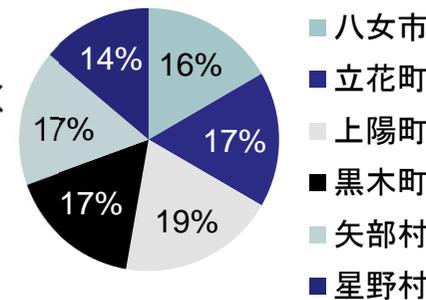
1. 前回参加回数



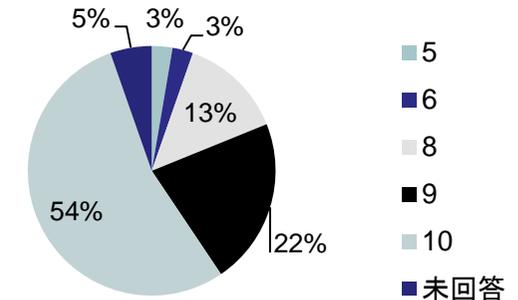
2. 次回参加希望



3. 居住地域



4. CFM開局の際、視聴するか



※数値は「希望する」が「10」、「希望しない」が「1」で10段階で表してもらったものである。

5. 他地域への興味(事前): 2段階目

6. 他地域への興味(事後): 3段階目

A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k
5	8	7	10	3	7	6	8	6	未	未	8	8	9	7	8	9	6	未	8	10	7	8	8	8	8	6	10	10	10	4	6	9	7	8	10	8
8	8	7	未	4	8	7	8	6	8	10	10	9	6	9	5	6	9	未	10	未	8	8	8	9	8	未	10	10	10	7	8	9	9	9	10	10

7. どのように他地域に関心を持ちましたか？

※アルファベットは参加者(前回のアルファベットとの関連性はない)、「未」は未回答。数値は「興味がある」が「10」、「興味がない」が「1」で10段階で表してもらったものである。

- ・村おこしに継げると思う
- ・実際に八女の人々が地域に対してどう感じているのか、知ることができ、更に、色々なことを知ってみたいと思いました。
- ・ラジオを作るなかで、地元の良さを再発見できた、他の地域のラジオも聞いてみたい。
- ・番組作りによって知っていたつもりがより気付かされた、(深く考えた)

8. 日常生活でどのように活用したいですか？

- ・子育ての中で、どうしたら自分の思いを子供に伝えられるか。少し時間をとって生活していきたい。
- ・伝えると伝わるの違いについて改めて他人の立場に立って考えることが大切だしコミュニケーションをとるのにいい。
- ・チラシや文章作成の時に「伝わる」ように考えていくことと、細かなエピソードを入れていくこと。



■ 楽生くらの開催結果

- 今年度3回のワークショップを通して、情報発信のプロセスを体験できたことは、主体的な情報発信の第一歩ではないかと考えられる。アンケートでも「人を呼び込むため、具体的にターゲットをイメージして企画をたてるのに役立つと思います。」と、日常生活の中で活用していこうとする姿勢が感じられた。
- 第3回、第4回の楽生くらぶではラジオ番組制作をし、終始和やかな雰囲気の中で、ラジオ作りを楽しんでいる様子がうかがえた。単に楽しむだけでなく、「実際に八女の人々が地域に対してどう感じているのか、知ることができ、更に、色々なことを知ってみたいと思いました。」「ラジオを作るなかで、地元の良さを再発見できた、他の地域ラジオも聞いてみたい。」「番組作りによって、知っていたつもりがより気付かされた(深く考えた)」など、地域に対する新たな気づきや関心の高まりがあったことが分かる。
- また第4回のアンケートでは、9割の方が継続して参加をしたいと回答し、来年度以降も継続して参加するなかで、参加者の主体的な情報発信につながっていくことが期待される。

■ 課題

- 市民による主体的な情報発信が実現できなかったことは、今年度の課題として挙げられる。ワークショップを通して、情報発信に対する関心の向上という点は達成することができたが、主体的な情報発信というところまでは結びつかなかった。今後ワークショップの開催によって、さらに情報発信に対する関心を高めるとともに、インターネットラジオサイト「八女の話音」を活用するなどして、市民による主体的な情報発信が行われるような体制を実現していきたいと考えている。

2-3-1-8. ラジオチームの活動結果2



■八女市元気ラジオの継続更新

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
ラジオUP数(回)	2	1	4	3	1	0	2	3	7	4	3	1	31

毎週金曜日更新に。

昨年度から続けている八女市元気ラジオでは、今年度計31回の番組を更新した。9月までは、不定期での更新であったが、10月からは更新日を毎週金曜日と固定とした。その結果、定期的に閲覧する方が増え、pv数もそれに伴い増加した。2月には月間pv数が600に達した。また、ラジオRadioRDPとの連携配信も果たした。

●Twitter

昨年度に引き続き「yame_pj」のアカウントを使い、主に八女市出張時のリアルタイムでの報告や八女市元気ラジオの更新の告知、八女市民の方などとの会話に用いた。結果として、今年度までに614回のツイートを果たすとともに214名をフォローし、223名からフォローされ、11個ものリストに追加されるに至った。

●Facebook

Facebookでは、ラジオチームのアカウントを作るのではなく、メンバー個人が持っているアカウントを用いて、市民の方々と個人対個人としての交流関係を築いた。また、八女市元気ラジオの更新の告知や楽生くらすの宣伝に用いるメンバーもあり、八女市元気プロジェクトとしての活動につなげることもできた。

※ 八女市元気ラジオ、Twitter、Facebookの全てのデータは、2012年3月9日現在までのものである。

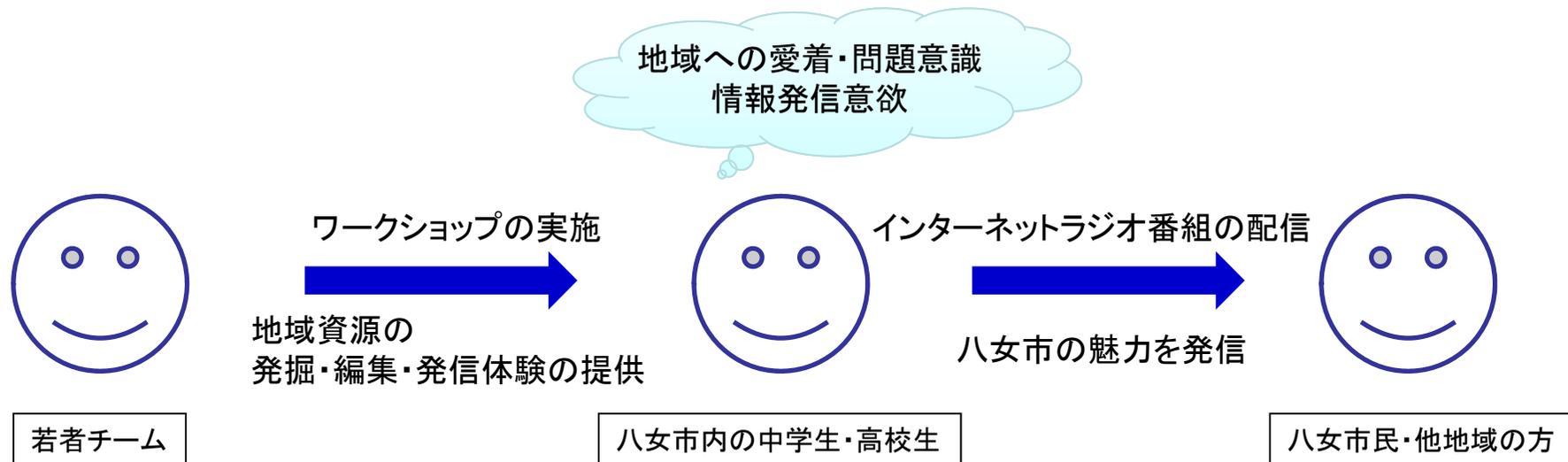
2-3-2. 若者チームの活動概要



■活動概要

新八女市を形作っていく上で、これからの地域を担う若者の視点は欠かせないものである。また、八女市元気プロジェクトが昨年度市民の方に行ったアンケートの結果からも、若者の地域活動への参加を望む声が多く見られた。「若者チーム」はそうした八女市における地域情報化・発信を担う若者の育成を目指して活動している。具体的な活動内容としては、八女市在住または在学の中学生・高校生を対象に、ジュニアケースメソッドと呼ばれる、地域の魅力や地域が抱える課題を考えるディスカッションの授業や、インターネットラジオ番組を制作するワークショップを実施する。これらを行うことにより、地域資源の発掘・編集・発信体験を通して、若者の八女市への愛着や問題意識、情報発信意欲の醸成を目指す。

■活動イメージ



2-3-2-1. ワークショップの内容



■実施日

2011年9月28日(水)～30日(金)

■実施校

福岡県立輝翔館中等教育学校(八女市黒木町)

■参加者

高校1、2年生の有志の生徒10名
(男子1名、女子9名)

■日程

- 1日目(28日13:30～16:00):
ジュニアケースメソッド①
- 2日目(29日13:30～16:00):
ジュニアケースメソッド②
- 3日目(30日13:30～16:30):
インターネットラジオワークショップ

■ジュニアケースメソッド(JCM)とは

19世紀からビジネススクール等で使用されてきたケースメソッドの手法を、飯盛研究室VITA+が高校生用に独自に開発したものであり、地域のまちづくり活動を題材にしたケース教材を元に、地域の魅力や地域が抱える問題をディスカッションする授業である。2005年から現在までに日本各地の中学生・高校生約1100名に実施され、参加者のコミュニケーション能力の向上や地域への関心の芽生え、主体的行動などの効果をもたらしている。

■流れ

①予習	ケース教材を熟読し、事前課題シートに記入をしてくる。
②JCMの説明	今日どんなことをするのか、説明を行う。
③アイスブレイク	参加者の緊張をほぐすため、簡単なゲームを行う。
④ケース教材のおさらい	読解の差をなくすため、ケース教材にどんなことが書かれていたか簡単におさらいする。
⑤クラスディスカッション	大学生のディスカッションリーダーによる舵取りの下、参加者全員でディスカッションを行う。地域の魅力や抱えている課題について検討。
⑥グループディスカッション	4、5人のグループに分かれ、クラスディスカッションで話し合ったことを踏まえて、地域が抱える課題の具体的な解決策等を考える。
⑦プレゼンテーション	グループディスカッションで話し合ったことを模造紙にまとめ、発表する
⑧まとめ	今日学んだことについてディスカッションリーダーにより簡単なまとめを行う。

2-3-2-2. ジュニアケースメソッド(1日目)



■ ケース教材

「20年目をむかえるTシャツアート展のこれから～砂浜美術館の魅力に惹かれた村上健太郎さんの挑戦～」

■ ディスカッション内容・狙い

この日は、高知県幡多郡黒潮町にあるNPO法人砂浜美術館の事例を扱ったケース教材を用い、ディスカッションを行った。NPO法人砂浜美術館は、何も無い砂浜に黒潮町の魅力を見出し、それを発信していくという活動をしている。砂浜美術館のメインイベントであるTシャツアート展は全国から参加者があるほどファンが多い一方、地元の人々の参加が少ないという課題を抱えている。この事例について考えてもらうことで、地域の魅力とは何か、また地元の人々が地域の魅力を見つけることの意味は何かということを高中生に考えてもらった。このディスカッションを経て、八女市の魅力を考える土台作りを行うことを狙いとしていた。



<ディスカッションの様子>

NPO法人砂浜美術館について

- 1989年誕生。2003年にNPO法人化。
- バブル期のまちづくりに疑問を抱いた睦地和也さんの発案。
- コンセプト「私たちの町には、美術館がありません。美しい砂浜が美術館です」
- スタッフ7名
- Tシャツアート展、キルト展、シーサイドはだしマラソン、エコツアー、砂像彫刻などのイベントを開催

<使用したスライドの一部>

2-3-2-3. アンケート結果(1日目)



1日目のジュニアケースメソッド実施後、参加者を対象にアンケート調査を行った。

●またジュニアケースメソッド授業に参加したいと思いますか。

はい(8名)／いいえ(1名)／無回答(1名)

●何故、また参加したいと思ったのですか。

おもしろいし、楽しいから。／他人の考えを知ることができる。／ディスカッションする機会がなかなかないから。自分の考えを発表するのに慣れたいから。／人の意見を知ることができた。／ディスカッションに慣れたい。自分の考えがしっかり言えるようになりたい。／おもしろかった。たのしかった。すごかった。／いろんな人の様々な意見を聞くことができたから。

●本日のケースリーダーに、ぜひ皆さんのコメントをください。【良かった所】

私たちが出した意見に質問を下さったことで私たちの意見が深まった。／ゲームがあった点。明るくて楽しかった。／けっこういろんな人が自分の意見を発表できていたところ／話しが聞き取り易かった。／進め方がスムーズで良かったです。／テーマや、課題の提示の仕方や、説明がとても分かりやすかったです。ディスカッションの途中で、出された意見をまとめて整理してくださったので、自分の中でも考えを整理することができました。あと、ずっと笑顔でいてくださったので、緊張しすぎずに参加できました。／あまり堅苦しくない雰囲気、楽にディスカッションに参加できたので、良かったです。

●本日のケースリーダーに、ぜひ皆さんのコメントをください。【改善点】

もっとグループディスカッションの時間を増やしてほしい。／ホワイトボードに書いているのをまとめて下さっているのは分かりますが、全部拾わなくてよかったです。聞いている人にとっては、頭で整理するのが大変でした。質問が抽象的だと思います。／時間編成／私たちが話すだけじゃなくて、最後にもいいのでケースリーダーさんの意見や考えも聞いてみたかったです。

●今回使用したケースのディスカッションの内容を踏まえて、あなたが一番考えた事は何ですか。

Tシャツ展がこれからどのようにしていくべきか、事前学習のうちからよく考えていた。／私は、地域の活動や行事に全くといっていいほど興味がなかったので、今日のディスカッションで、もっと地域のことに興味をもって参加していかないといけないと思いました。／自分が地方の為に何が出来るか。／自分の地域では何が特色かどうか／人に自分の意見を伝えることのむずかしさ。／自分の住んでいる地域には、どんな誇れる場所や、活動している人がいるのだろうかと思いました。／自分の住んでいる地域の良さについて。／地域のことについて…。

●今日のジュニアケースメソッドについてご家族に話したいと思いますか。

全くそう思う(0名)／そう思う(2名)／どちらでもない(5名)／そう思わない(3名)／全くそう思わない(0名)

2-3-2-4. ジュニアケースメソッド(2日目)



■ ケース教材

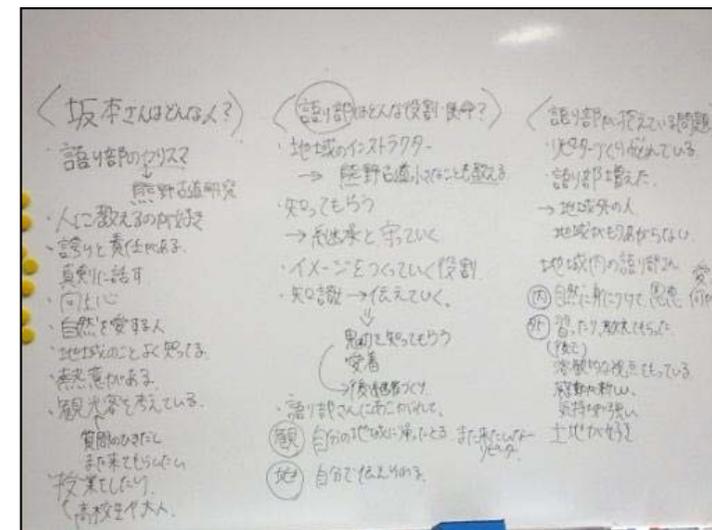
「世界文化遺産『紀伊山地の霊場と参詣道』で活躍する語り部～カリスマ坂本勲生さんの思い～」

■ ディスカッション内容・狙い

この日は、和歌山県の世界遺産熊野古道の語り部の事例を扱ったケース教材を用い、ディスカッションを行った。2日目の目標は、語り部の事例を知ることにより、「地域の情報を発信するということはどういうことなのか」について考えてもらうことである。今回最終日にインターネットラジオ番組制作に取り組んでもらうのにあたり、高校生は熊野古道の語り部と同じように、「地域の情報を伝える人」になる。ディスカッションを通して、地域の情報を伝えるとどんな影響があるのか、地域のことを伝える立場をどう生かして地域を良くしていけるかを考えてもらい、翌日のラジオ番組制作に生かしてもらうことを狙いとしていた。



<ディスカッション・プレゼンテーションの様子>



<クラスディスカッション時の板書>

2-3-2-5. アンケート結果(2日目)



2日目のジュニアケースメソッド実施後、参加者を対象にアンケート調査を行った。

●またジュニアケースメソッド授業に参加したいと思いますか。

はい(8名)／いいえ(2名)

●何故、また参加したいと思ったのですか。

色々話し合えて、地域に今まで以上の関心がでてきた。人々の思いが何となく分かったし、自分の知らないところで、そんな風に思っている人がいるんだと実感した。／新しい発見ができる／いろんな人の意見や考えが聞けてたのしかったから。こういう考え方もあるんだと思えたから。／自分の意見を発言するのに慣れないといけないと思うから。／視野がひろがったから／意見を発表することに慣れたい。いろいろな人々の話を聞きたい。／たのしかったから／みんなでいろいろな話し合いができたから

●本日のケースリーダーに、ぜひ皆さんのコメントをください。【良かった所】

自分の地域に関心が増えた。仕事の誇りとか、なんか今まで以上に伝わった。／時間配分がよかった。／途中とちゅうでおさらいとかいれてくれたこと。たまにふってくれたこと。／話がまとまっていた。時間配分がよかった。／人の意見を丁寧に聞いてくれて、話しやすかったです。自分のまとまっていな意見を、弁解してくれて、分かりやすく書いてくれたり、嬉しかったです。／時間編成。分かりやすかったです。／お話しもわかりやすくて、興味がもてました。／質問の仕方が、分かりやすかったです。明るい雰囲気だったので、話しやすかったです。／たのしかった。おもしろかった。／明るくディスカッションできて良かったです。

●本日のケースリーダーに、ぜひ皆さんのコメントをください。【改善点】

ゴールが見当たらない。／休み時間を増やしてほしいです。／言いだしやすい雰囲気をつくってほしい／リーダーさんの意見を聞きたかったです。

●今回使用したケースのディスカッションの内容を踏まえて、あなたが一番考えた事は何ですか。

周りの意見をどう、自分の中に取り込んでいくのか。／かかえる課題について。／語り部さんの立場に立つこと。／地域のことで、どうしようもない問題に対して、自分たちの考えをまとめなければいけなかったことについて。／伝える側としてどう地域を改善するか／自分の考えをうまくまとめるためにはどうしたら良いか。／熊野古道に行ってみたい。／地域の大切さ／地域のことについて伝えていく大切さ

●今日のジュニアケースメソッドについてご家族に話したいと思いますか。

全くそう思う(0名)／そう思う(4名)／どちらでもない(4名)／そう思わない(2名)／全くそう思わない(0名)

2-3-2-6. インターネットラジオワークショップ(3日目)



■内容

- 1日目、2日目はジュニアケースメソッドを通して、地域の魅力発掘、地域情報の発信について考えてもらった。これをふまえ、最終日は高校生に自分たちで地域の魅力を発信する体験を通して、地域の情報発信の楽しさを感じてもらおうことを狙いとしてインターネットラジオワークショップを行った。
- 参加者に「インターネットラジオを用いて、八女市内の人に向けて八女市が持つ魅力を発信せよ！」というミッションを与え、①誰に伝えるのか②情報は正確か③みんな協力できているかという3つのポイントを頭におきながら、2グループに分かれてラジオ番組の制作をしてもらった。

■流れ(時間:180分)



2-3-2-7. ラジオシナリオ作成の手順



- ワークシート①記入(個人・宿題)
「八女市の魅力はどんなところだと思いますか？」
「どうしてそれを魅力だと思ったのですか？」



- ワークシート①の内容をグループ内で共有



- ワークシート②記入(グループ)
「伝えたい八女市の魅力は何ですか？」
「どうしてそれを魅力だと思ったのですか？」
「誰に向けた番組にしますか？」
「その人たちはその『魅力』について今、どう感じていると思いますか？」
「以上をふまえて、番組視聴者に『魅力』をアピールしてみてください。」



- 必要に応じ、PCでさらに詳しく情報を収集



- ワークシート③記入(グループ)
「番組のタイトル」
「話す人・話す内容」

<ワークシート③>

2-3-2-9. 結果と改善点



■ 結果

- 2つのラジオ番組が生まれた。

テーマ	恋愛成就(グループ1)	伝統産業(グループ2)
対象	八女市内にいるカップル	八女市内の小学生・中学生
内容	矢部村にあるハート岩などのおすすめスポット、八女津媛神社にまつわる神話を紹介し、八女市を「訪れると幸せになれる場所」として紹介する。	八女市に住む小学生と祖父母の会話仕立てで、提灯や手すき和紙、仏壇など、若い世代に敬遠されがちな伝統産業を親しみやすいものとして紹介する。

- 輝翔館中等教育学校でのジュニアケースメソッド実施後のアンケートにより、「私は、地域の活動や行事に全くといっていいほど興味がなかったので、今日のディスカッションで、もっと地域のことに興味をもって参加していかないといけないなと思いました。」「自分の住んでいる地域には、どんな誇れる場所や、活動している人がいるのだろうと思いました。」「地域に今まで以上の関心がでてきた。」など、参加者(八女市在住・在学の高校生)の地元地域への関心の芽生えがみられた。それは、今後地域情報化・発信を担う若者を増やしていく上での重要な第一歩となったように思われる。
- また、インターネットラジオワークショップにおいては、参加者一人一人が目を輝かせてラジオ番組作りに取り組み、地域の情報を伝えることの楽しさを感じてもらうことができた。さらに、参加者がシナリオに自分たちの実体験を織り交ぜたり、地元の人だからこそ分かる方言を使ったりなどの工夫をしたことにより、八女市の高校生だからこそ伝えられる八女市の魅力を発信できていた。
- このことから、ラジオを聞いてくださった人に、地域の若者がその地域の情報を発信することの意義や可能性を感じていただくことができたように思われる。輝翔館中等教育学校内では、参加者と担当の先生により、全校生徒に向け、自主的にワークショップの内容を報告する機会が設けられ、こうした高校生の取り組みを広める動きもみられた。

■ 改善点

- 今年度はワークショップの実施により、八女市の若者の地域への関心や情報発信意欲の醸成を達成することができたが、実際に若者が自主的に情報発信を行うところまでを見ることはできなかった。今後は、若者による自主的な情報発信をサポートしていけるような仕組みを整えたいと考えている。
- 今年度は一校のみの実施にとどまったが、今後ワークショップの実施校、回数を増やしていくと共に、若者のみのコミュニティに留まらず、若者と大人の異世代交流の場も作っていきたいと考えている。

2-3-3. ITチームの活動概要



■活動概要

- 八女市には、旧市町村ごとに多くの魅力的な地域資源が存在するが、それらが上手く共有できていない現状がある。一方で、光回線の導入があり、通信インフラストラクチャーが整備された。八女市は大合併により広大な面積をもつため、物理的な距離を超えるインターネットの可能性は大きいと考えられる。しかし、通信インフラストラクチャーの整備だけで、市民がそれらを効果的に活用することに繋げることは難しい。そこで、私たちは「自ら地域の資源を発信する仕組みがあれば、地域資源の再発見及びITリテラシーの向上に繋がるのではないか」という仮説をたてた。
- 本活動は、この仮説のもと、ITチームがこれまで湘南地域において活用してきたインターネット市民塾という地域情報化の道具を、八女市においても導入、適用し、市民から地域の資源を発信する仕組みを作る。
- 例えば、ITチームがこれまでに手掛けてきた情報発信の中の一つ「e-手仕事図鑑」においては、湘南地域に受け継がれている手仕事である片瀬ゴマと湘南シラス漁を取り上げた。具体的には、取材と体験学習を通じて、子どもたちにも手仕事を体験してもらい、手仕事の内容、取り組まれている人の姿などを、音、映像、イラストと3つの方法で情報発信した。



2-3-3-1. 八女市におけるインターネット市民塾活用の探究



- ITチームでは、「市民が地域の資源を発信する仕組み」を八女市で作るため、インターネット市民塾という道具を八女市に紹介し、導入、活用するための方策を探究する。
- 富山で始まったインターネット市民塾では、市民が自分が教えられることを講座にし、それをネット上で発信したり、実際にface-to-faceの会を開催したり、学び合う仕組みが作られている。この講座は、「企画」→「取材」→「発信」というプロセスで作られる。八女市への導入・活用方法を探究するため、今回は、第一歩として、企画は市民の方が担当し、取材と発信は学生が担当するという役割分担をして進めた。そして、最後に、講座全体を企画し、インターネット市民塾を「活用」するためのワークショップを開催した。

①企画

- ・ まず、ワークショップを開催し、「八女市の観光プラン」をテーマに講座の企画に取り組んだ。

②取材

- ・ 次に、ここで市民の方が作成したプランを、学生チームが体験し、取材した。実際に取材をしたり、体験したりすることにより、編集や発信の際に、想いを効果的に伝えることができた。

③発信

- ・ ITチームが運営している湘南地域の市民塾サイトにて、市民の方が作成した「八女市の観光プラン」をウェブページとして発信ができるよう編集し、アップした。今回は、テーマが観光プランであったため、外部への発信が重要であると考えた。そこで、八女市関連のサイト以外で発信することにより、今まで八女市のことを知らなかった方に興味を持ってもらうことを狙った。

④活用

- ・ 今後、市民の方が自らインターネット市民塾を活用しやすいようにワークショップを開催した。具体的には、インターネット市民塾によるウェブとリアルの両方による「学び」の事例を考えるとともに、実際にインターネット市民塾を使ってみたり、講座全体を企画した。

2-3-3-2. ①企画(ワークショップ)



■開催日時

- 8月26日17時～19時(黒木総合支所 大会議室)参加人数9名
- 8月27日17時～19時(おりなす八女 交流室B)参加人数16名

■ワークショップ

市民の方が企画に取り組む機会を作るため、ワークショップを開催した。テーマを「八女市の観光プラン」に設定し、インターネット市民塾で重視されている情報発信のストーリーづくりを体験する内容である。具体的には、「ストーリー、主観、想い、伝える、動かす」をキーワードに、表面的なデータではなく、八女市民にしか分からない主観をストーリーを通して伝えることで、八女の魅力を発信する。インターネット市民塾のこれまでの活動結果によると、市民や個人ときに企業が行う情報発信というのは、行政にはできない主観的、挑戦的な情報発信が可能である。また、「想い」を伝え、情報だけでなく、心も共有することにより、よりリアルの場での行動が生み出される可能性が高まる。

■流れ

今回のワークショップの目的→ITチームの説明→個人ワーク→グループワーク→発表会→アンケート

■結果

情報を発信する際にストーリーが重要であることを伝え、作成してもらったことにより、自分の町への愛着や思い出に自信をもてるようになったと思われる。誰もが持つストーリーが、情報発信にとって効果的であることを知ることで、情報発信に対する敷居を下げ、関心を持ってもらうことができたと思われる。

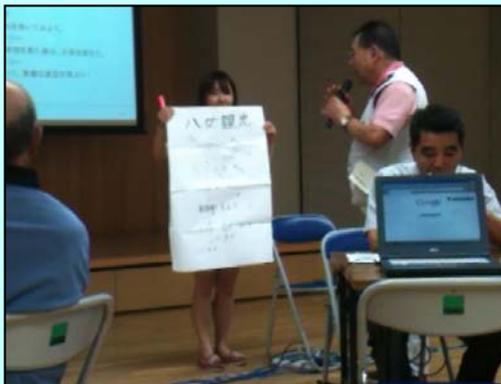
■改善点

- ラジオチームと合同でワークショップを行ったが、そのつながりをしっかりと伝えることができなかった。
- 参加者に合わせたワークショップ設計や相手への事前の連絡や準備が不足し、ITチームとして何を伝えたいか、どんなワークショップにしたいかをしっかりと伝えることができなかった。
- 今年からの参加であったにも関わらず、ITチームの立ち位置や目的を、市民の方々に十分な説明などをせずワークショップを進めてしまった。

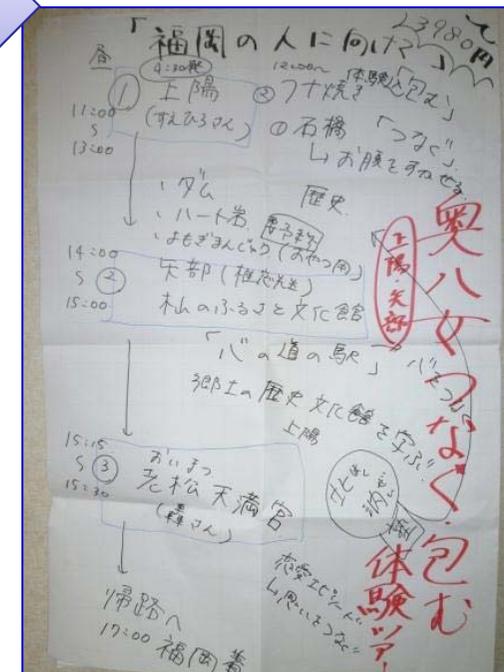
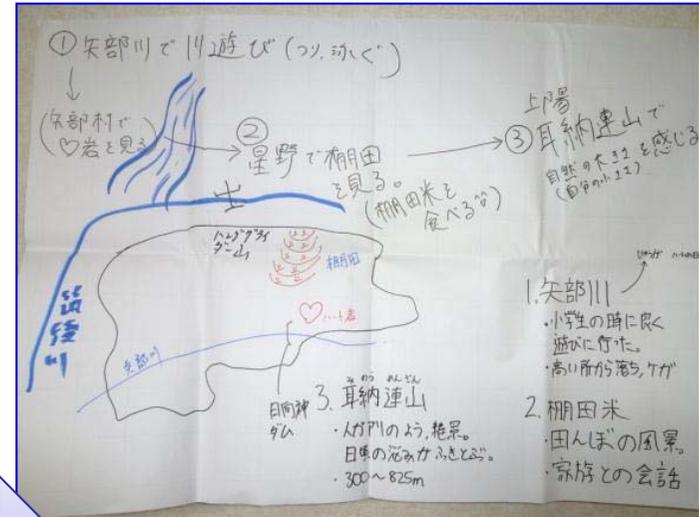
2-3-3-3. ワークショップ風景



8/26 ワークショップ (黒木総合支所)



8/27 ワークショップ (おりなす八女)



観光プラン
企画シート

2-3-3-4. ワークショップアンケート結果



回答者11名

(男性、40・50代:3名、60代:8名)

■項目

1. 今回のワークショップに参加したきっかけ
2. 本日のワークショップに関し当てはまるものに○をつけてください。
 - A. 本日のワークショップの内容はわかりやすかったですか
非常にわかりやすかった/わかりやすかった/ややわかりにくい/わかりにくい
 - B. 本日のワークショップの内容に興味はもてましたか
非常に興味深い/興味をもった/やや興味をもてない/興味を持ってない
特に興味持った点があったら教えてください_____
 - C. 本日のワークショップに新たな気づきはありましたか
気づきが多かった/気づきがあった/気づきをあまり感じなかった/気づきはなかった
 - D. 全体の評価を5段階の中から選んでください(5が良いです。1が悪いです。)
3. 今回のツアープランを講座化する以外で、SFC市民塾に今後どのようなことに期待しますか
4. 最後に本日のご感想・ご意見がございましたら、ご記入をお願いします。

■きっかけ

- ・八女の魅力がどう展開していくか興味があった
- ・八女の歴史、観光地等をもっと知りたい
- ・町づくりに生かしたい
- ・知人に誘われた
- ・前回からの継続的な参加

内容	分かりやすかった	わかりやすかった	やや分かりにくい	わかりにくい	
	4人	6人	1人	0人	
興味	非常に興味深い	興味を持った	やや興味を持ってない	興味を持ってない	
	0人	11人	0人	0人	
気づき	多かった	あった	あまり感じられなかった	なかった	
	2人	7人	2人	0人	
全体評価	5	4	3	2	1
	2人	7人	2人	0人	0人

■感想

- ・様々な方の意見を聞いてよかった
- ・2月末の観梅会で何かとセットした企画をしてみたい
- ・八女に来て、現地で活性化してほしい

2-3-3-5. ②取材(フィールドワーク)



■日時

- 8月27日: グリーンピア八女→ハート岩→霊巖寺→釈迦カレーハウス
- 8月28日: 杣のふるさと文化館→伝統工芸館



ハート岩前の鐘を鳴らす



釈迦カレーハウス
釈迦カレー



杣のふるさと文化館
椎窓氏による案内



伝統工芸館
手すき和紙の作業風景

■ストーリーの体験、取材

- それぞれ前日のワークショップにおける市民の方々の観光案をもとに取材へ向かった。実際にお話をうかがっていた場所を探した。霊巖寺では、有名な珍宝岩だけではなく、市民の方に伺った丸石の様子をみることができ、そこには一つ一つ手作業で積み上げられた言う歴史やこの丸石をきれいにしたいという市民の方の思いを感じることができた。ハート岩では金を鳴らし、釈迦カレーハウスでは市民の方の思いでの味を堪能した。
- 杣のふるさと文化館では、椎窓猛氏に館内を案内していただいた。廃校のため、まだ学校として使われていた時のお話や、世界子ども愛樹祭コンクールについて開催の意図や作品に対する思いなどのお話を伺った。
- 八女伝統工芸館では、手すき和紙の作業風景や福島の燈籠人形について取材した。日本一大きい金仏壇、日本一大きい石燈籠や提灯など多くの八女市の伝統文化を見ることができた。

2-3-3-6. ③発信



- ワークショップで市民の方と共に考え、ITチームが取材、体験した観光プランを、ITチームが運用する湘南地域の市民塾サイト(SFC市民塾)に「八女市元気プロジェクトの」ページを作り、アップした。



八女市元気プロジェクトのページ



八女市観光プラン ハート岩→霊巖寺→釈迦カーリーハウス

八女市観光プラン 柚のふるさと文化館

2-3-3-7. ④活用(ワークショップ)



■日時・会場

2011年12月16日(金) 17:30~19:30 おりなす八女 交流室B

■参加人数

5名(行政の方1名、KIAIの方1名を含む)

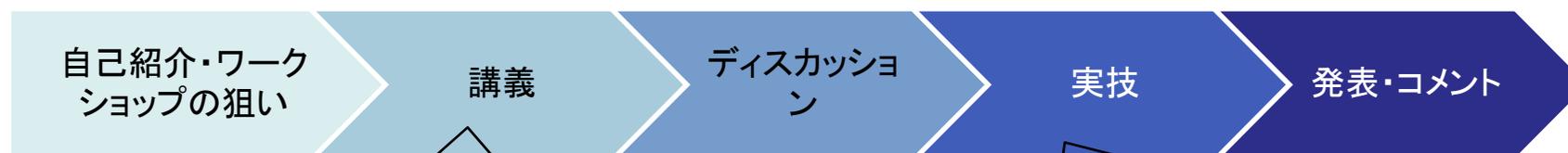
■目的:

ウェブとリアルとの融合により、効果的で持続的な活動が起きる仕組みを考える。

■方法:

- インターネット市民塾によるウェブとリアルとの両方による「学び」の事例を考える。
- 実際にインターネット市民塾の講座を企画する。

■当日の流れ:



- ・インターネット市民塾について
- ・キーとなるコンセプト
- ・組織構造
- ・講座例
- ・スクーリング例

- ・アカウント設定
- ・八女市ツアーにコメントする
- ・講座企画

2-3-3-8. ワークショップの内容・結果



■内容

- 今回のワークショップは、インターネットに興味がある人を対象に専門性を高めたものを行った。講座例では富山インターネット市民塾の「女子力UP講座」、スクーリング例では私たちITチームの「片瀬ゴマ」の講座を使った。それらを見て、女子力アップ講座から新しい講師や活動が起こった要因や講師が自分より詳しい人がいたらどうするかというテーマでディスカッションを行った。実践では、講座を「タイトル、講座概要、到達目標、ターゲット、スケジュール」の観点で企画していただいた。最後にネットワークにおける、「弱い紐帯」「強い紐帯」と創発の概念・プロセスについて共に考えた。

■結果

- 今回は、普段から情報技術を使っているITリテラシーのある市民を参加対象としたことにより、地域情報化の一例や情報発信、ネットワークなど専門的な内容のワークショップを行うことができた。また、実際に地域情報化で成功している事例を見てもらうことでまちづくりに必要な要素を考えてもらうこともできた。その結果、情報技術をまちづくりに生かすために必要なことを、具体的に考えることができたと思われる。その他、私たちが八女市の方がインターネットを使ってどのようなことをしたいかを知る機会にもなった。

■改善点

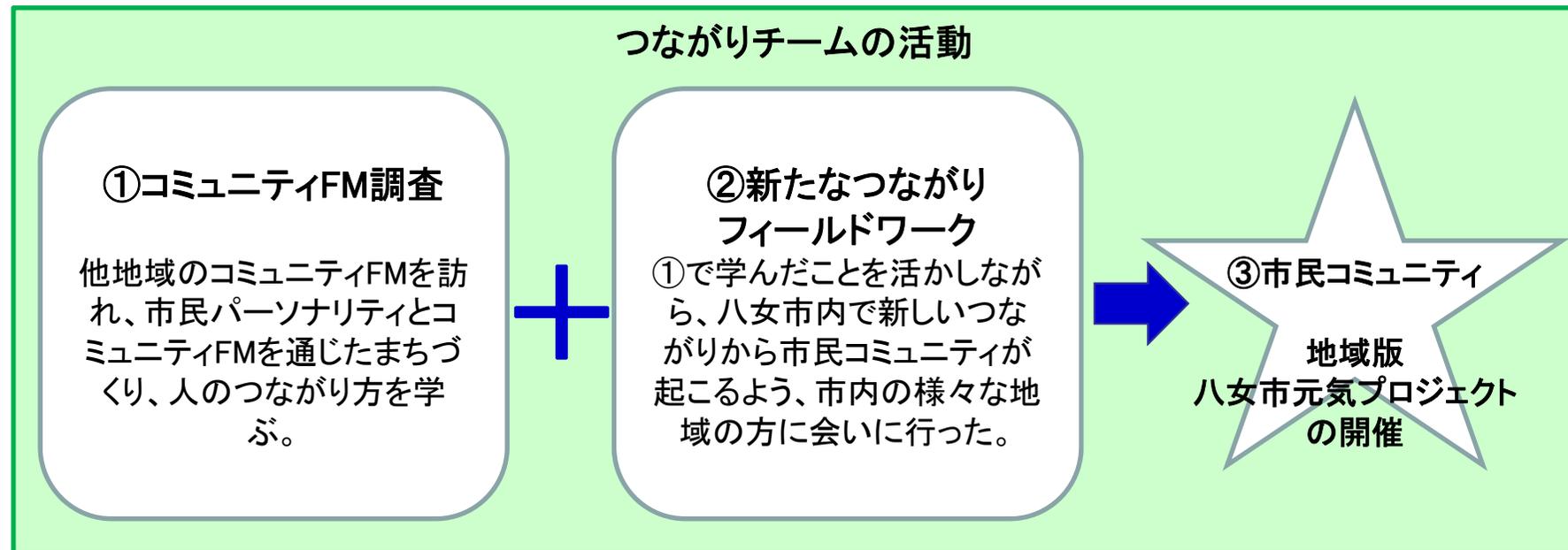
- 専門性を高めることによって、参加者が制限されてしまったことや、八女市の方々の中からインターネットに興味がある人材を探すことが難しかった。
- 参加者の層を広げることや多くの方々と交流し、ネットワークを広げる必要がある。
- 講義やディスカッションの内容を重視したため、実際に企画や作成をしていただくことが少なかったのは課題と言える。



■活動概要

コミュニティFMを活用した地域活性化の基盤構築に向けて、市民のコミュニティ形成、及び活動の創発は必要不可欠である。昨年度から八女市元気プロジェクトの活動を通じて市民と学生の交流は少しずつに行われているが、一方で市民間の既存の枠を超えた新しいつながりの創出はこれからである。そこで私たちは、新たなつながりから創発が生まれる地域コミュニティ“地域版八女市元気プロジェクト”が必要であると考えた。そこで、それぞれアプローチや考えの違う人々がコミュニティFMを活用した地域活性化の基盤構築に向けて活動できるよう、コミュニティ形成を促進していく。そのために、2つの軸で活動を行った。1つは、他地域のコミュニティFM調査である。もう1つは、新たなつながりから市民コミュニティを形成するために、八女市民の様々な地域の方に会いに行くフィールドワークを実施した。

■活動イメージ



2-3-4-1. コミュニティFM調査①



■取材先

レディオ湘南

■日時・場所

2011年5月26日（辻堂駅近くカフェにて）



<DJ HAGGY氏>

出所:レディオ湘南ウェブページ

■概要

レディオ湘南は、本大学の近くにあるコミュニティFMである。ここには、コミュニティFMのパーソナリティにして全国人気ラジオDJランキング(大手AM,FM含む)で2年連続1位を獲得したDJ HAGGY氏がいる。今回はそのDJ HAGGY氏にインタビューを行い、開局当時どのような苦労があったのか、地域密着のラジオパーソナリティとして大切にしていること、どのような人物がラジオパーソナリティに向いているかなどを伺った。

■レポート

開局当時は、自宅から仕事場までに通る家一軒一軒にはがきでお知らせを送るなどの営業を徹底して行い、営業活動が非常に重要であるということを教えていただいた。パーソナリティは、地元出身で地元のことをよく知っていること、市民との交流を欠かさずにいることを重視し、温かみのある番組を目指している。八女市で活動するにあたり、営業活動に力を入れるきっかけとなるインタビューとなった。

2-3-4-2. コミュニティFM調査②



■取材先 FMふくおか

■日時
2011年8月17日



<FMふくおかのスタジオ内>



<FMふくおかのスタジオ>
出所: FMふくおかウェブページ

■概要

「茶のくに八女は楽しい」の番組にメール投稿したことがきっかけとなり、収録現場の見学と取材をさせていただいた。また本活動の共有をさせていただいた。

■レポート

県域のラジオ放送局ではあるが、ラジオ作りをする上でパーソナリティが重要であること、綿密な取材が必要であることなどを直接スタジオで教えていただいた。また、この番組は八女市役所観光課の依頼で番組制作されていることを教えていただき、その後、私たちも観光課の方にもプロジェクト活動に参加いただけるようになり、その契機としても重要な活動であった。さらに、このインタビューをきっかけにパーソナリティの杉本幸智世氏との交流も生まれ、活動の情報共有もさせていただいている。番組ディレクターは交代したが、現在でも番組との情報共有も続いている。

2-3-4-3. コミュニティFM調査③



■取材先

FM桐生

■日時

2011年11月1日～5日



<市民パーソナリティへインタビュー>



<FM桐生の番組に出演>

■概要

コミュニティFMには市民の参加、地域の協力が不可欠である。群馬県桐生市のFM桐生は市民パーソナリティが100名を超え、地域の情報発信源としてまちづくりに大きく寄与している。また番組を通してまちづくり活動の輪が広がり、FM桐生がまちづくりの創発の場となっている。このような仕組みになった理由を理事長の塩崎氏、事務局長の小保方氏にインタビューし、また市民パーソナリティ10名にどうして参加するようになったのか、その理由をインタビューし、八女市でもコミュニティFMが創発の場となるために必要なものは何か、取材を行った。さらに、桐生のまちづくり視察のため有隣館、無隣館を視察し、織物の町、桐生の祭である「桐生ファッションウィーク」を見学した。

■学んだこと

小保方氏は、「まずは少ない人数で小さなコミュニティをつくることから始まり、そこから輪を広げていかなければならない。また、コミュニティの中でそれぞれ役割を与えることも活気づかせるために必要である。コミュニティの中でもコネクタ(人とひとをつなげる役割の人)は、相手の温度に合わせて行動できるかどうかが重要である。」とおっしゃった。そのことから、「地域版八女市元気プロジェクト」も少人数からはじめ、コネクタとなる市民の方とのミーティングなどの活動にシフトしていくこととなった。また、市民パーソナリティを始めたきっかけは、ゲストで出演したというものが一番多く、このことからコネクタのつながりが市民参加を広めた要因であることがわかった。市民パーソナリティ同士のコミュニティもできており、私たちが目指すコミュニティ形成のあり方のモデルとなっていると考える。

2-3-4-5. 新しいつながりフィールドワーク



2011年8月17日、26日～28日	黒木、星野、立花
<ul style="list-style-type: none"> ● 新メンバーをつれて黒木、星野、立花をまわった。黒木では矢部川周辺、大藤藤棚を歩き、道行く人に八女市元気プロジェクトの紹介も行った。星野では星野文化館に伺い、星野の資源を堪能した。立花では道の駅たちばなに伺い、森さんに道の駅ができたきっかけと現在の状況などについて伺った。その後大道谷の里に行き、民宿についてのお話を伺った。新メンバーにとっては八女市のそれぞれの特徴の違いを知る機会になり、元からいるメンバーにとっても何度も訪れることで前回気がつかなかった部分に気づく機会にもなった。市民と作るエコツーリズムの参考にもなり、またこのフィールドワークでさらに多くの市民に八女市元気プロジェクトを知ってもらうことができた。 	
2011年8月19日	インターネットラジオ情報番組「八女茶ごくごく」
<ul style="list-style-type: none"> ● 本プロジェクトのワークショップにも参加している椿原氏、松尾氏が制作・放送しているインターネットラジオ情報番組「八女茶ごくごく」に出演した。椿原氏、松尾氏は、本プロジェクトの活動が始まった当初からワークショップに参加しており、twitterなどの交流の中で今回の出演が決まった。この出演でメンバーの木下氏、山崎氏と知り合うことができ、その後も交流させていただいている。 ● 八女市元気プロジェクトの話をさせていただき、八女市のまちづくりについて、八女市の魅力についてメンバーの方とお話させていただいた。本プロジェクトもつながりチームをはじめラジオチーム、若者チームもインターネットラジオ番組を作成しているため、相互に情報交換をしていききっかけとなった。 	
2011年11月25日	JTBコミュニケーションズ九州
<ul style="list-style-type: none"> ● 8月のフィールドワークで八女伝統工芸館でアンケート調査をしていた時、JTBコミュニケーションズ九州の吉村章子氏と知り合い、互いの事業紹介を行った。その後、これまでの活動を教えていただくため、また本プロジェクトの活動を伝えるために、本社を訪ね、田中徹部長と面会したのがこのフィールドワークである。「茶のくに八女・奥八女」という88人の市民の方に声をかけ、一つのコミュニティおよび観光として売り出すという案を行政や市民との話し合いで作上げた。その形はまさしく私たちが行うコミュニティ形成の先駆けであり参考になった。また、これまで私たちがお会いしてきた方々全員と知り合いで、さらに多くの市民の方をご紹介いただいた。田中氏は地域に入ってまちづくりをするプロで、どうすれば市民を巻き込んでいけるのか、私たちの目指すコミュニティ形成に必要なものは何かを指摘いただいた。事業の最後に一つイベントをやることの重要性もおっしゃっていただき、その後実現に向けて動いていききっかけとなった。 	

2-3-4-5. 新しいつながりフィールドワーク(続き)



2011年11月26日	茶のくに八女・奥八女の物産・観光展
<ul style="list-style-type: none"> ● 前日のJTBコミュニケーションズ九州訪問の際、物産展のことを聞き、この日に伺った。田中氏に、市民の方を紹介いただきながら物産展を視察した。物産展は、それぞれの出展者が店を出すだけでなく、八女市に因んだ催し物や福岡のアイドルのパフォーマンスなども多くあった。これまでに会った市民の方も出展されていた。例えば、道の駅たちばなの森氏や、ソマリアンカレーの轟氏、線香造りをなさっている馬場氏一家などに再会することができた。また、八女市役所観光課の方にご挨拶させていただく機会も得た。さらに、FMふくおか「茶のくに八女はたのしい」の新しいディレクターの方も紹介いただき、交流を深めた。これまで何度も訪れたことのある八女市であったが、ここで始めて知る活動も多く、このようにそれぞれの活動が一同に介する場を自分たちもつくっていかねばならないと感じさせられた。 	
2011年12月28日	市民の方の案内によるフィールドワーク
<ul style="list-style-type: none"> ● これまでフィールドワークは行政の方に八女市を案内していただいたが、市民の方に案内されたことはなかった。そこで、八女市元気プロジェクトの活動に参加している末廣氏に協力いただき、上陽、星野の中で、末廣氏のおすすめの場所を中心に巡るフィールドワークを行った。これは個人の思いが詰まった場所を巡ることにより、観光パンフレットなどには載らない市民目線の八女市資源の発掘と発信に繋がるものであった。例えば、末廣氏お気に入りのちゃんぽん屋や上陽で小さい頃遊んだ川での思い出、一番好きな景色など、末廣氏だからこそできる地域資源を教えていただいた。こうした市民目線での観光資源の発信、フィールドワークの重要性を認識するとともに、案内する側も自らどこをどう案内するか考える機会となることもわかった。これをきっかけに、3月により多くの市民とフィールドワークを行う企画が生まれた。 	
2012年2月21日	インターネットラジオ情報番組「八女茶ごくごく」
<ul style="list-style-type: none"> ● 2011年8月以来、今回はつながりチーム全員で「八女茶ごくごく」に、市長公室の井手氏も一緒に参加した。前半の打ち合わせでは、3月4日のぼんぼり祭りにおける市民と学生の活動発表「八女の話」に、どのような形で参加して下さるのか、シフトの組み方などについて話し合った。その後、「八女茶ごくごく」の収録で、改めて本プロジェクトを説明し、「八女の話」の説明も行った。「八女茶ごくごく」は市内でもリスナーが多く、実際、3月4日には「八女茶ごくごく」を聴いてきました、という方も多数おり、宣伝効果がみられた。 	

2-3-4-6. 新しいつながりフィールドワークの様子



<8月26日~28日@星野文化館>



<8月26日~28日@道の駅ちばな>



<8月26日~28日@大道谷の里>



<8月19日@八女茶ごごく>



<12月28日@星野>



<2月21日@八女茶ごごく>

2-3-4-7. 地域版八女市元気プロジェクト会議



	第1回	第2回
日時	2011年11月24日	2011年12月28日
場所	黒木総合支所会議室	おりなす八女交流室B
参加人数	5人	6人
内容	<ul style="list-style-type: none"> ● 本プロジェクトのようにそれぞれアプローチや考えの違う人々が集まり、何かこれから継続的に活動していくにはどうすればよいか、私たちの活動にこれまで継続的に参加くださっていた市民の方と一緒に会議を行った。 ● その中で別々の活動している人が集まるメリットが共有されていないことや、その軸となる目的が曖昧であることに指摘をいただき、地域版八女市元気プロジェクトの軸を学生側ではっきりさせておく必要があることがわかった。 ● この話を受け、これからの活動は八女市元気プロジェクト全体の活動と連動させながら、2012年に開局するFM八女を盛り上げていく場にしていくことが決まった。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 3月頃、おりなす八女において、市民と学生が各々の活動を発表し合うイベントを行う企画を学生側で考えていた。 ● 話し合いを進めていく中で、3月までに参加団体を集めること、準備を進めていくことが、現実的に厳しいと市民の方が指摘してくださった。そこで、学生主導でなく行政、市民の方を中心に話し合いが進み、その活動発表展示会を、3月4日のぼんぼり祭りの中で行うことが決まった(後に「八女の話」という名のイベントになる)。 ● その他、Facebookなどを使って町を紹介しながら鬼ごっこをするサイバー鬼ごっこの企画も生まれた。 ● この頃から、徐々に地域版八女市元気プロジェクトの当初の目的である”市民の方中心の活動”になっているように思われた。



<第2回の様子>

2-3-4-8. つながりチームの活動結果と改善点



■ 結果

① コミュニティFM調査

- 他地域のコミュニティFMの現状とまちづくりとの関係性、人のつながり方を学んだことを活かし、昨年度よりも多くの八女市民の方とつながった。
- FM桐生では、取材したことが契機となり交流が生まれ、疑似体験まちづくりディスカッション第3回において、塩崎氏、小保方氏の八女市での講演とディスカッションが実現した。そして、塩崎氏から「今後も情報交換や交流をFM八女完成後もしていきたい」との言葉をいただいた。

② 新しいつながりフィールドワーク

- 6回のフィールドワークにより、新しい市民とのつながりを築くことができた。また、私たちの活動の理解者である末廣氏、八女茶ごくごくの松尾氏、椿原氏、木下氏、山崎氏、道の駅たちばなの森氏、許斐氏と共に、目標であった地域版八女市元気プロジェクトの原型ともいえるコミュニティができた。
- FM桐生での取材やフィールドワークの様子を伝えるラジオ番組「Yameshi Network Station」を制作し、「八女の話音」で公開している。他地域の情報を八女市の市民の方に伝えることが狙いである。

③ 地域版八女市元気プロジェクト

- ②のフィールドワークを通して生まれたコミュニティから、地域版八女市元気プロジェクトを2回開催し、ぼんぼり祭りにおいて「八女の話」を共に企画・実行することができた。これらのコミュニティには、八女市の市長公室や観光課の職員も会議に参加しており、行政、市民、学生の3者が、立場を超えて話し合う場を設けることができた。

■ 改善点

- つながりチームが、新たなつながりを作り、コミュニティを形成することにより、他チームの活動にも新しい市民の方に参加してもらえるようにすることも、目標の一つであった。しかし、対象者が、ラジオチーム、ITチームと重なり、結果的に本プロジェクトの活動に特定の人にしか参加してもらえなかった。
- 来年度は、もっと多くの市民の方に参加してもらえるよう、広報活動の幅も広げる必要があると感じた、

2-3-5. 勉強会の開催

今年度は、4チーム体制となったため、チーム間での情報共有、連携も重要であった。そこで、定期的に勉強会を開催することにより、情報の散逸を防ぎ、チームを越えたコミュニケーションを活性化することを目指した。具体的には、八女市元気プロジェクトとしてできること、八女市のこと、ラジオのこと、チームのビジョン、個人の思いなどを伝え合ったり、考えたりした。

第1回	10月20日	プロジェクトを振り返る
プロジェクトメンバーの増加や新たに繋がりチームが結成されたことに伴い、前八女市元気プロジェクトメンバーから八女市の概要、飯盛研究室が関わる意味、夏合宿の様子、問題意識、解決方法、ビジョン、1年目のワークショップやフィールドワークなどプロジェクト活動の様子を全体で共有した。また2年目の夏までの活動についても共有した。内容は、ラジオチーム、ITチーム合同の情報発信に関するワークショップ並びに若者チームによる輝翔館中等教育学校でのワークショップの様子や結果である。		
第2回	10月24日	プロジェクトのこれからを考える①
第1回の内容を踏まえ、あらためてビジョンの言葉の定義や今年度目標達成のための個人の目標をディスカッション形式で出し合った。具体的には、「地域活性」とはどういう状況なのか、八女市に必要なことは何なのかといった観点で議論した。		
第3回	10月31日	プロジェクトのこれからを考える②
第1回、第2回の全体での言葉の定義や個人のビジョンをもとに、チームごとのビジョンを共有し、議論した。プロジェクト全体の目的である「資源化プロセスの体験とコミュニティ形成を生かした、地域住民の主体的な活動を促進」というフレーズから、チームごとのターゲット層やそのターゲットに何を一番伝えたいのか、何を一緒に学びたいのかを共有し、チームが抱えている不安な点や疑問点をプロジェクト全体で話し合った。		
第4回	11月7日	ワークショップ設計
この回では、ワークショップの目的を参加者に今まで以上に伝えるため、また積極的に参加してもらうためにどうしたら良いのか、若者チームが手法をレクチャーした。具体的には、ワークショップには3つの大きな要素「チーム・プログラム・ファシリテーター」やティーチングノートの作成、参加者を考えた目標設計、ワークショップを行う環境設計などを学んだ。		

2-3-5. 勉強会の開催(続き)

第5回	11月14日	コミュニティFMを学ぶ
<p>この回は、ラジオについてのレクチャーを受けた。内容は、1,ラジオ放送、FM放送の仕組み、2,具体的な番組の構成、3,FMらしさ/A Mらしさ、4,FM桐生から見るコミュニティFM、5,八女のコミュニティを考えるであった。ラジオの基本的なシステムや作られる工程を知ることにより、今後のワークショップに使える要素を抽出した。そして、コミュニティFMの特徴や必要性を認識し、今後のプロジェクトのビジョンをよりラジオを活用するまちづくりという方向性が見えてきた。</p>		
第6回	11月16日	Open Research Forum における発表練習
<p>11/22,23に行われるORF2011(慶應義塾大学SFCオープンリサーチフォーラム)において、飯盛義徳研究室のブースで八女市元気プロジェクトの研究紹介をするための情報共有と練習を行った。発表内容の確認だけでなく、会場で予想される質問に対する対応やそれぞれのチームの言葉の定義などを共有し、プロジェクトとしての一体感と、来場者への説明を統一した。</p>		
第7回	12月5日	活動反省
<p>ラジオチームとつながりチームから、これまでの活動を報告し、浮かび上がってきた反省点や課題を共有した。そして、「1,チーム毎の連携、2,行政と学生間での連絡、3,より多くの市民に活動を知ってほしい、4,地域間のつながり/コミュニティの形成」という大きく4つの観点に分類し、次回にその解決のための具体的方策を考えることになった。</p>		
第8回	12月12日	企画立案
<p>第7回に挙げた課題を解決するための方策をグループワーク形式で考え合い、プレゼンし合った。市民の方に向けた発表の場を設けることやポリコムによる遠隔会議、他地域での活動を一か所で紹介できるようにするなどの企画案が上がった。</p>		
第9回	1月19日	八女合宿の企画
<p>第8回挙げた企画である「ORF in Yame」という合宿形式の学生と市民合同の発表会について、つながりチームが市民の方と話し合った内容を共有した。そのコンテンツとして上がってきた、Ustreamの配信やサイバー鬼ごっこについて具体的なイメージややり方について意見を出し合い、企画の詳細や担当者を決めた。</p>		

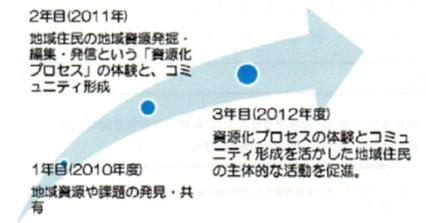
2-3-5-1. 勉強会のワークシート(一部)

第4回:ワークショップ設計

第2回: プロジェクトのこれからを考える

10月24日八女市元気プロジェクト勉強会
文責: 杉智史

～復習～
八女市元気プロジェクトとは…
2010年度、福岡県・八女市・九州テレコム振興センター (KIAI) ・慶應義塾大学飯盛義徳研究室の連携により発足した、八女市活性化プロジェクト。市民・行政・学生チームが三位一体となり、コミュニティFM・インターネットを活用した地域活性化のためのプラットフォーム設計を実践と研究の両輪により行う。(ORP 概要部分より抜粋)



2年目(2011年)
地域住民の地域資源発掘・
編集・発信という「資源化
プロセス」の体験と、コミュ
ニティ形成

3年目(2012年度)
資源化プロセスの体験とコミュ
ニティ形成を活かした地域住民
の主体的な活動を促進。

1年目(2010年度)
地域資源や課題の発見・共
有

議題

① 概要でも使われている「地域活性化」とはどういったことを意味していると思いますか？

② ①で考えた地域活性化を八女市元気プロジェクトが目指す上で最も大切なことは何だと思いますか？1つだけあげてください。

③ 今年度の目標を達成するために、現時点で各人が(各チームではありません)行うべきことはありますか？自分自身に不足している部分から考えていただいてもかまいません。

実践！ワークショップ・デザイン

- お題
「藤沢市民が藤沢市の魅力を発掘するワークショップ」
- 必ず以下の点を盛り込んでください
コンセプト(狙い・タイトル・参加者・場所・時間)
プログラムの流れとそれぞれの目的
環境設計(椅子等の配置の仕方、用意する備品等)
- シンキングタイム30分
- のちほど、内容と工夫した点を発表してもらいます！



- ① チームごとの連携がうまくとれてない
- ② 行政⇄学生の連絡
- ③ 八女市元気PJを市民にどう伝えるか
- ④ 市民の繋がり、コミュニティをどう形成するか

第5回:コミュニティFMを学ぶ

11月14日(月) 八女市元気プロジェクトCFM勉強会
八女市元気プロジェクト
杉 智史
木口 恒

目標: ラジオ放送、FM放送に関する基礎的知識の補充、及びCFMの具体的な事例の考察
教室: e14
授業形式: 講義(双方向の講義を目標とし、積極的に指名をしたいと思います)
当日の流れ: 以下の5つのプログラムを、スライドを用いて進行

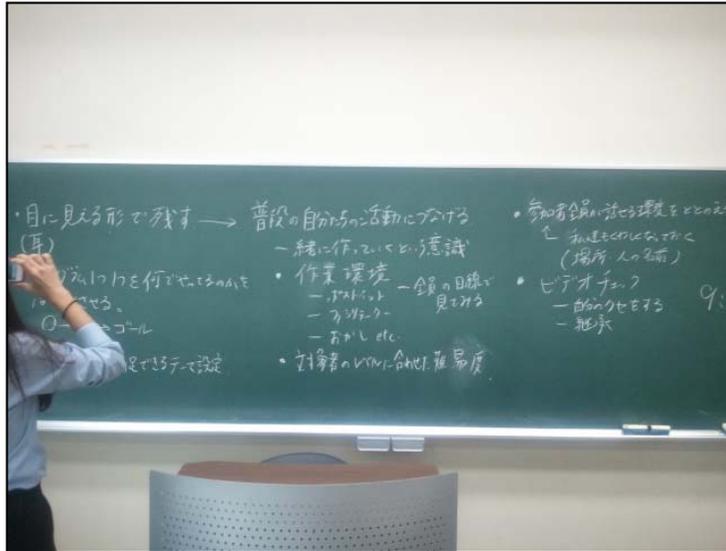
- 1・ラジオ放送、FM放送の仕組み(木口)
CFMを語る前に、実際のラジオ放送、FM放送の概要を考える。
- 2・具体的な番組の構成(木口)
ラジオ番組の出来上がり方、番組の基本的な構成。
- 3・FMらしさ、AMらしさ(木口・杉)
CFMはFMでもあり、AMでもあると言われる。FMらしさ、AMらしさを考える。
- 4・FM嗣生からみるCFM(杉・繋がりチーム)
FM嗣生を例に、CFMの内部を観察する。
- 5・八女のCFMを考える(杉・木口)
八女市元気プロジェクトとして、出来るだけ現実的に八女市のラジオ構想してみる。

以上

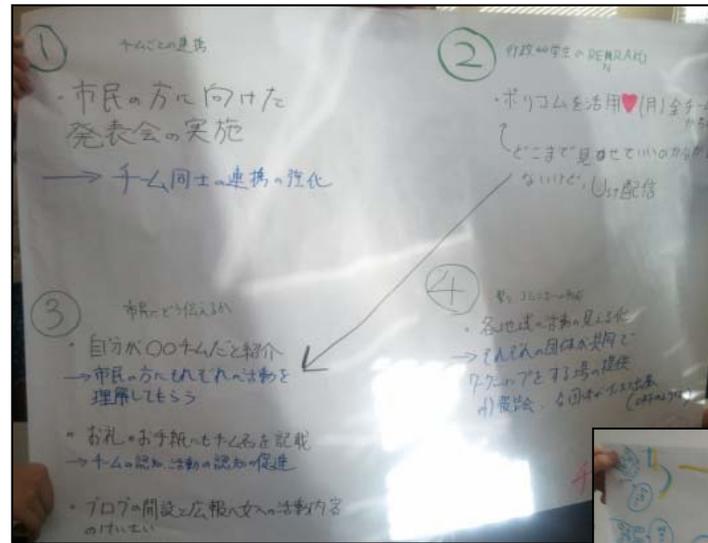
第8回:企画立案

2011年度八女市元気プロジェクト

2-3-5-2. 勉強会の風景



ワークショップ設計 板書



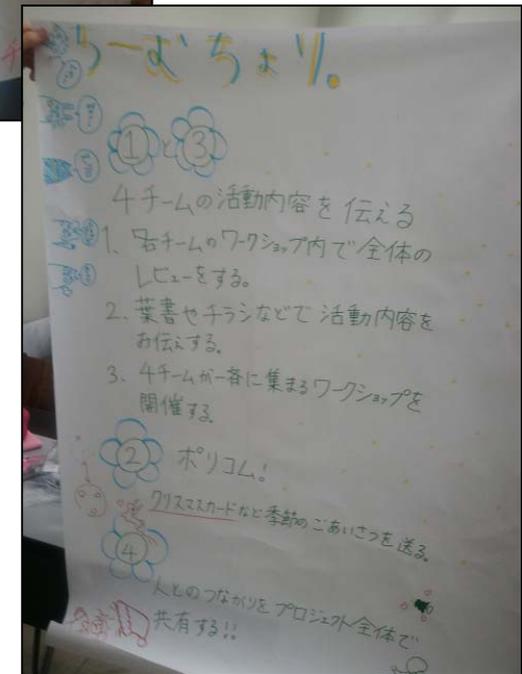
グループワーク 企画案シート1



グループワーク風景1



グループワーク風景2



グループワーク 企画案シート2

3

2011年度プロジェクト成果

3-1. 成果1:「資源化プロセス」

- まず、本年度は、2つの目的を実現するために活動してきた。その1つである「資源化プロセス(地域資源の発掘・編集・発信)を身につける」における成果について説明する。
- 4チーム全てが、ワークショップの開催、フィールドワークの実施を通し、市民の方が地域資源を発掘、編集する機会を構築した。その成果として、インターネット市民塾にITチームのワークショップに参加した市民の観光プラン講座がアップされ、インターネットラジオサイト「八女の話音」<<http://www.kiai.gr.jp/yamegenki/index.html>>には、3チームから生まれた市民のラジオ番組がアップされた(一部、アップ予定)。

ラジオチーム

市民制作番組(名称未定・準備中)

3回のワークショップから、10個の市民制作番組が生まれた。それらを学生たちが編集し、配信する。

1. 星野①星野村からお茶の話題、緑茶・紅茶
2. 星野②星野茶のいいところたくさんラジオ
3. 立花①立花の果物を使ったワインについて
4. 立花②八女特産隊がお送りする、八女地域限定の八女茶
5. 立花③八女茶物語の美味しいお茶の話
6. 矢部①山芋(自然薯)のおいしさ、食べ方、お求め方法について
7. 矢部②矢部村のいいところ、古民家を買って矢部村に行こう
8. 上陽①八女市の魅力がつまったDVDの紹介
9. 上陽②専門家を交えて、古民家の魅力について
10. 上陽③女性5人でお送りする、八女茶ラジオ



若者チーム 「YYRADIO」

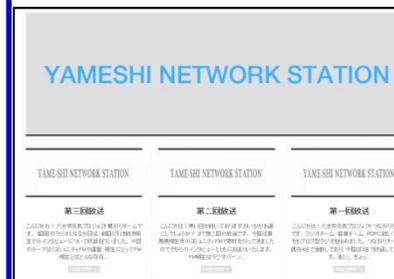
輝翔館中等教育学校でのインターネットラジオワークショップにおいて完成した上記のラジオ番組を、八女市の若者が八女市の魅力を伝えるラジオ番組「YY RADIO (Yame Young Radio)」にて配信。



つながりチーム

「YAMESHI NETWORK STATION」

FM桐生での取材やフィールドワークの様子を伝えるラジオ番組「Yamwshi Network Station」を制作し、「八女の話音」で公開している。他地域の情報を八女市の市民の方に伝えることが狙いである。



3-2. 成果2:「コミュニティ形成」

- 次に、本年度の2つ目の目的「コミュニティ形成」における成果について説明する。
- つながりチームが、フィールドワークにより八女市内の様々な地区、分野の方と出会い、発展させて、市民コミュニティ「地域版八女市元気プロジェクト」会議を2回開催した。従来からあるつながりではなく、新たなつながりで市民が集まり、意見を交わす機会を構築したことがまず成果の1つである。
- さらに、その「地域版八女市元気プロジェクト」の話し合いの中から、学生と市民が各々の活動を発表し合う活動展示発表「八女の話」(やめのわ)が、ぼんぼりまつりの中で実現したことが大きな成果である。

「八女の話」in ぼんぼりまつり

■目的

八女市では、個々で様々な活動が行われている。しかしながら、それらを知る機会や学び合う機会が少ない。そこで、これらの活動を共有する場を作ることにより、既存の活動同士のコラボレーションや既存の活動への新規参加者、新たな活動が生まれることを目指す。その結果、それぞれの団体の活動の幅が広がり、合併した新八女市の一体感が高まると考えられる。さらに、行政・市民・学生の三者の意見交換の場が生まれることも期待できる。

■第1回「八女の話」

第1回は、今後継続的に八女の話を開催するための土台を作ることとを目的とした。そのため、八女市の伝統的な祭り「雛の里・八女ぼんぼりまつり」の中で開催することにより、八女市やその周辺地域に住む多くの方に伝えられるようにした。同時に、学生が八女市の祭りの参加者になることにより、地域の中に入って、市民と共に活動をするきっかけにもなった。

■第1回「八女の話」内容

1. パネルの展示・パネラーによる活動紹介(参加団体:道の駅たちばな・八女茶ごごく・八女市元気プロジェクト)
2. 八女茶の提供
3. テレビ電話を活用したぼんぼりまつりの中継
4. スライドショー(ラジオチームの成果、昨年度と今年度の祭りの写真)



<八女の話のパネル展示>



<参加団体集合写真>

3-3. 成果3: ORFにおける発表

■ ORFでの研究発表

- ORFとは、Open Research Forumの略であり、「湘南藤沢キャンパス(SFC)で行われている産官学連携の推進を目的として慶應義塾大学SFC研究所が主催するイベント」のことである。1996年に始まり、今年で16回目になり、ここでは、SFCで研究を行っている各研究会がブースをもち、パネル発表や成果物の展示、デモンストレーションを行う。またブース説明のほかに専門家や教授のセッションやワークショップなども行われる。2日間で、約4000名の来場者(教員、学生、高校生、専門家、企業人、メディア、一般)が集まる。今年度のORFは「学問のシンカ」と銘打ち、2011年11月22日(火)・11月23日(水)の2日間にわたり、東京ミッドタウンで行われた。
- このイベントにおいて、八女市元気プロジェクトも、「情報技術を活用した八女市活性化のためのプラットフォーム設計」というタイトルで発表を行った。



<ブースの様子>



情報技術を活用した八女市活性化のためのプラットフォーム設計
一慶應義塾大学 飯盛義徳研究室 八女市元気プロジェクト—
杉聖史(総合政策学部4年)、藤田美帆(総合政策学部3年)、藤川麗希(総合政策学部3年)、松野幸奈(総合政策学部2年)
第26号

■ 概要

2010年度、福岡県・八女市・九州アレコム振興センター(KIAI)・慶應義塾大学飯盛義徳研究室の連携により発足した、八女市活性化プロジェクト。市長・行政・学生チームが三位一体となり、コミュニティFM・インターネットを活用した地域活性化のためのプラットフォーム設計を実践と研究の両輪により行う。

■ 背景

1. 八女市とは
八女市は福岡県中部、福岡市から南へ約50kmに位置し、北は久留米市、北西部は高井郡、西は筑後市、南は熊本県、東は大分県に接している。面積は492.53㎢、総人口約2万人である。2006年10月1日に上尾町、2010年2月1日に基津町、立花町、基野村、大野村を編入合併し、現在の八女市に至る。平成22年度にブロードバンド・ゼロ地域の創出を目的に「光回線インターネット」を敷設。また、市内全域への防災・行政情報及び生活情報の伝達を目的とした「コミュニティFM放送」の整備を進めている(平成24年度開局予定)。

2. コミュニティFM放送の特徴

	FM	CFM
放送地域	県単位	市町村単位
対象	セグメントリスナー	地域住民
出演者	専門のパーソナリティ	ある程度のスキルを備えた人
防災機能	○	◎

一防災に優れた地域情報発信ラジオ
しかし防災放送として緊急時に機能するためには、地域住民による普及からの高い聴取率、高い認知が必要である。

■ 今年度の目標

地域住民の地域資源発掘・継承・発信という「資源化プロセス」の体験とコミュニティ形成を目指す。

目標を達成するための4つのアプローチ

1. 若者に合わせたアプローチ

新八女市を形作るべく、これからの地域を担う若者の視点は欠かせないものである。そこで、八女市立または在学の中学生・高校生を対象に、地域的に地域情報化・発信を担う人材の育成を行う。地域の魅力や抱える課題を伝えるグーテラスセッションや、インターネットラジオ発掘の制作等、地域資源の発掘・継承・発信を通じて、八女市への愛着や関心醸成、情報発信意欲の醸成を図る。

2. IT技術の活用と向上を目指すアプローチ

インターネット上のサービスであるSNSを用いて、住民による主体的な地域資源の発掘及びコミュニティ形成を目的とする。インターネットは地理的に制約を越えて情報発信ができるツールであり、その情報発信のプロセスを通じて地域において新たなコミュニティが形成される可能性がある。しかし、ITインフラストラクチャーの普及度は高いものの、ITの利活用ができる人材は少ないのが現状である。そこで、ワークショップと住民のIT利用のサポートを通じて、目的の達成を目指す。

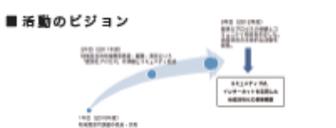
3. 魅力発掘に傾く市民へのアプローチ

コミュニティFM発掘のためには、市民のコミュニティFMに対する高い認知・運営の能力が必要である。魅力発掘に傾く市民をターゲットに、地域資源を題材にしたラジオ番組の制作を目的としたワークショップを開催する。そうすることで、ラジオの効率的な活用方法を学ぶ機会を提供し、コミュニティFMへの関心を高めてもらい、ラジオに関わる市民のコミュニティ形成を目指す。

4. 住民間の繋がりを強化に向けたアプローチ

八女市活性化を目指す上で住民間の市民活動は必要不可欠である。そこで上記3つのアプローチを通じて市民学生と地域住民の繋がりが、更に地域住民同士の繋がりを形成し、市民活動の基盤を形成する。地域住民同士の情報共有および情報発信を円滑に行うため、観光・教育・食などそれぞれの専門分野に関連した八女市市民と共に関心の形成を目指す。

■ 活動のビジョン



昨年度の課題

- 八女市の現状を把握するため旧市町村でフィールドワークを実施。
- 地域住民の地域資源の再認識・魅力共有を目的としたワークショップの開催。

一市民同士の意識共有の重要性を認識。これまで旧市町村間の交流が少なかったため、それぞれの魅力の共有がなされず、外から見て八女市としての魅力発露が不足しているように感じた。

■ お問い合わせ先

杉 聖史(総合政策学部4年)
Mail: s08408ss@sfc.keio.ac.jp

八女市元気プロジェクトウェブサイト
<http://isagaki.sfc.keio.ac.jp/yame/>
興業局インターネットラジオサイト「八女の賑わい」
<http://www.kiai.gr.jp/yamegenki/>

<発表に用いたパネル>

3-4. 成果4:メディア掲載・ラジオ出演

<西日本新聞 2011年8月23日付>



コミュニティFM 新たな市民活動の場に

来年度からのコミュニティFM開設に向けて準備を進めている八女市は21日、講演会「市民の声をラジオに乗せて地域を創る！」を開催した。地域の町づくり団体メンバーら約70人が、先進地域の実情などを学んだ。

昨年からの市に情報通信技術（ICT）を用いた地域振興策を提言している慶応義塾大学松倉政策

八女市で講演会

運営者ら先進地の実情説明
開局へ役割など学ぶ

学部の飯盛徳准教授（経営学）、FM桐生桐生市のNPO法人桐生地域情報ネットワークの塩崎泰雄理事長が登壇して、先進地の人材情報などをFMで利用したいと想ったのがきっかけ。運営面では約1000人のボランティアが育ち、新しい市民活動の場にもなっている。放送局設立の経緯や成果を紹介。東日本震災では発生日夜から翌朝にかけて生の情報を発信する唯一のメディアだったと災害時の役割も強調した。

飯盛准教授は「八女は歴史も遺産物も豊かだけれど地域資源として掘りくりが浅いのか、共通認識での『資源化』が必要。その上で大学や企業など外部の者やICTを活用してほしい」と述べた。

コミュニティFM開設に向けて八女市で行われた講演会

<西日本新聞 2012年2月26日付>



みんなのFM 成功させよう

八女市が新年度開局

FM八女市が全編出陣。番組制作は、久松菜生さん（出演者）が担当。番組制作は、久松菜生さん（出演者）が担当。番組制作は、久松菜生さん（出演者）が担当。

八女市の市花市センターで開かれたラジオ番組制作体験ワークショップ

きょうまで番組作り体験 情報提供者発掘も狙う

自主制作番組を放送するのは、町おこし団体「みんなのFM」のメンバーら。そのほか、町おこし団体「みんなのFM」のメンバーら。そのほか、町おこし団体「みんなのFM」のメンバーら。

<ラジオ出演一覧>

日時	チーム	出演者	ラジオ局	番組名
2011/9/20	つながり	杉	FM桐生	「MoeCo」
2011/9/20	つながり	杉	FM桐生	「ランチどきっ！」
2011/9/21	つながり	杉	FM桐生	「Club Kiryu」
2011/11/2	つながり	杉	FM桐生	「You've got Kiryu！」
2012/2/16	ラジオ	藤川・仁田 原・深野	ドリームスFM	「ほとめきラジオ」

<ラジオ紹介>

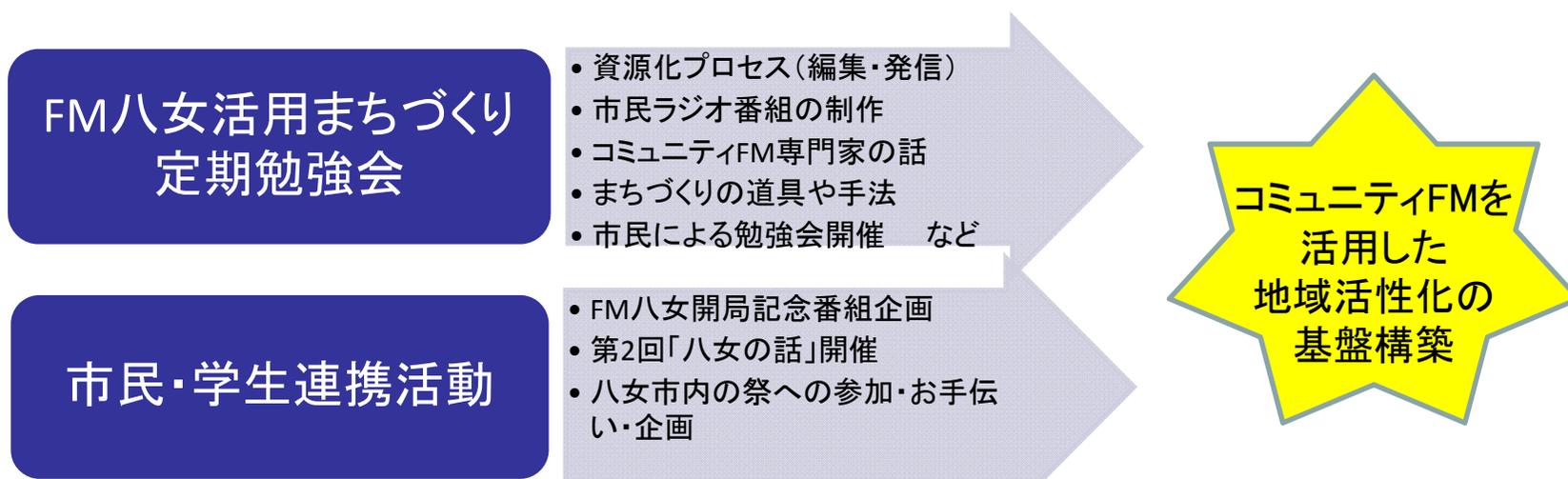
2012年3月11日、NHKラジオ第1の「東日本大震災1年 災害時のラジオの役割は」にて、本プロジェクトの取り組みが紹介された。

4

2012年度のプロジェクト提案

4-1. 2012年度活動内容の提案

- 今年度目指していた「資源化プロセス」の発掘と編集の導入部分までは、提供できたが、発信するための編集と発信の部分については学生が担当した。そのため、市民の方の手に渡すことができなかった。
- そこで、2012度は、「資源化プロセス」の発信までを市民の方が身につけることに力を入れながら、3年目の目的である「資源化プロセスとコミュニティ、そしてコミュニティFMなどのメディアを活かし、市民一人一人が主体的に地域活性化に取り組んでいく」ための活動を目指す。
- 具体的には、2つの活動を考えている。1つは、「資源化プロセス」や専門家の話など、FM八女を活用したまちづくりに取り組むうえで参考となる道具や手法を学ぶ定期勉強会の開催である。もう1つは、FM八女の開局記念番組制作や「八女の話」など市民の方と学生が一緒に企画・実行する連携活動である。





平成23年度「八女市元気プロジェクトーコミュニティFMを活用した地域活性化ー」
2011年度提言報告書(2011年度事業成果資料)

平成24年3月

慶應義塾大学飯盛義徳研究室

〒252-0882神奈川県藤沢市遠藤5322-ε 406

E-Mail: isagai@sfc.keio.ac.jp / mizue@sfc.keio.ac.jp

(総責任者:飯盛義徳/総括プロジェクトリーダー西田みづ恵)